

市町村合併公開セミナー  
まちづくりと市町村合併

平成 15 年 3 月 23 日(日) 開演 13 : 30  
両津市民会館

主催者挨拶

小田初太郎 佐渡市町村合併協議会長(畑野町長)  
落田 真一 新潟県佐渡地域振興局長

現況報告

齋藤 英夫 佐渡市町村合併協議会事務局長

基調講演

『離島振興と市町村合併』

松村 良幸 氏 対馬 6 町合併協議会 長崎県下県郡美津島町長  
全国離島振興協議会長

パネルトーク

「市町村合併から始まる 私たちのまちづくり、島づくり」

パネリスト

松村 良幸 氏 長崎県下県郡美津島町長  
川口 徳一 両津市長  
服部 晃 氏 佐渡総合病院長  
小田 拓哉 氏 佐渡青年会議所理事長  
佐々木和子 氏 新潟県農村地域生活アドバイザー  
塚本 健二 氏 新市の未来を考える会

コーディネーター

望月 迪洋 氏 新潟日報社編集委員室長

閉会挨拶

肥田 利夫 佐渡市町村合併協議会副会長(赤泊村議会議長)  
(敬称略)

## 開催挨拶

司会：皆様大変長らくお待たせいたしました。只今より、佐渡市町村合併協議会、新潟県の主催により「市町村合併公開セミナー まちづくりと市町村合併」をはじめさせていただきます。

現在、法定合併協議会である佐渡市町村合併協議会では今年6月に予定している、合併協定書の調印に向け新市建設計画や行政制度の調整が精力的に進められています。このような状況を踏まえ、私たちのふるさと、そして佐渡市町村合併論議をきっかけに合併後のまちづくり、佐渡の未来を皆さんとともに考えていきます。

それでは本日のプログラムをご案内させていただきます。はじめに主催者より皆様にご挨拶させていただき、その後20分間の現況報告、続きまして、約20分間ビデオを上映いたします。そのあと50分の基調講演、その後休憩を10分間いただいた後、最後に90分間のパネルディスカッションへと進めさせていただきます。終了は午後5時ちょうどを予定しております。申し遅れましたが私、本日の司会進行を務めさせていただきます高野凡子（たかのちかこ）と申します。どうぞよろしく願いいたします。（拍手）

それでは開会にあたり、主催者の佐渡市町村合併協議会の会長、小田初太郎（おだはつたろう）畑野町長より、皆様にご挨拶申し上げます。

小田：それでは市町村合併公開セミナー開催にあたりまして、謹んで一言ご挨拶を申し述べさせていただきます。今日は大変忙しい中、お繰り合わせの上、このように大勢の皆様方のご参集を得、盛大に開催をできる運びとなりましたことを、心からお喜びを申し上げたいと存じます。そしてまた、ご参会の皆様方におかれましては、大変ご苦勞様でございます。そして今日、基調講演として講演されます全国離島振興協議会、松村会長さんからご講演をいただくことになっているわけですが、日程を取っていただき講演をしていただくことに対しまして、私から心から感謝とお礼を申し上げ、当地発展のために誠に同慶に耐えないところでございます。

さて今佐渡の産業を見てもみますと、どうでしょうか。農業、漁業、林業、更に観光業が主体となっております。佐渡の若者が魅力ある企業立地が少ないこともあって、佐渡人口を考えてみますと、昭和25年には12万6千人をピークに減少し続けているところでございます。そこで平成12年10月の国勢調査を見てもみますと、なんと43%減少の7万2,173名という発表がなされているのでございます。この中の年齢構成人口を見てもみますと、0歳から1

4歳までの総人口に占める割合というのが13%、15歳から64歳までのいわゆる生産人口を見てみますと55%。そして残る65歳以上の高齢人口の総人口に占める割合が32%となっているところでございます。このように恒常的に人口の減少、それに伴う少子・高齢化、地域の活力の低下が大きな問題となっているところでございます。

更に加えて申し上げますと観光面でございます。平成3年には121万強の入込みの状況でございましたが、なんと昨年平成14年度の状況を見てみますと、78万1,859人ということで非常に大きく低下をいたしているところでございます。このような状況の中にあつて、私ども1市7町2村にあつては1島1市を目指して、何とか取り組んでいこうということで、平成13年6月22日に佐渡市町村合併検討協議会というものをつくり上げたところでございます。以来今日までいろいろと協議を重ねてきている訳であります。この3月の14日には、1島1市、1市7町2村の法定合併協議会の設置について知事に提出をし、現在に至っているところでございます。そこで私が思うことは、最も大切なことは、10か市町村全体として、新しい建設計画のもとで一体性の確保、住民福祉の向上、そして均衡ある発展をどのように求めていくかについての考え方というものを立てていかないと、いい合併にはならないと思っているところでございます。このような思いの中で当協議会といたしましては現在一丸となって英知を結集し、取り組んでいるところでございます。そこで平成16年3月1日を目標に合併ができますよう、全役員が、そしてまた、会員が一丸となって取り組んでまいりたい、このように考えているところでございます。どうか本日ご来場の皆様方におかれましては、ご自愛の上、従来にも勝るご啓発を賜り、この島がもっと明るく、そして豊かな島づくりのために、皆様方からは是非ご支援ご協力を賜りますよう心からお願いを申し上げます。最後になりましたが、今日の公開セミナーが成功されますよう、そしてご来場の皆様のご健勝、ご多幸を心からご祈念申し上げます。誠に措辞ではございましたが、私の挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

司会：ありがとうございました。続きまして同じく主催者であります新潟県より、新潟県佐渡地域振興局長、落田真一（おちたしんいち）がご挨拶申し上げます。

落田：佐渡地域振興局長の落田でございます。セミナーの開催にあたり一言ご挨拶を申し上げます。本日は本当に大勢の皆様からお集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。主催者の一人として厚く御礼を申し上げます。皆

様すでにご承知の通り、この3月13日に佐和田町さんが合併協議会へ復帰されました。再び10の市町村の皆さんが1島1市佐渡を目指して頑張ることになりました。大変喜ばしいことであると思っております。佐渡のこれからのまちづくり、島づくりのために、改めて心を一つにしながら来年3月までの残された期間、精力的に準備に取り組んでいただく、それを願うものでございます。佐渡は県内でも合併の取り組みが最も進んでいる地域の一つでございます。県内では佐渡地域を含む5地域におきまして、法定合併協議会が、また14の地域におきまして、任意の合併協議会が設置されるなど、市町村の数で約9割が合併に向けた協議が進展しております。このような状況の中で現在県内の3地域におきまして、市町村合併支援本部地域支部というものを、私ども県の機関の中に設置してございますが、来年度、平成15年度から県内全域におきまして、この地域支部というものを設置する予定でございます。そして合併協議の進捗の度合に応じた支援を県として、してまいるといふことにしております。

さて平成14年度におきまして、県では佐渡とか県内各地域におきまして、地域振興計画というものを策定してまいりました。先般佐渡におきましても佐渡地域振興計画というものを策定いたしました。これからの地方分権の流れを踏まえまして、市町村の自立的な地域づくりというものが大変重要になってまいります。県がそれを積極的に支援することが求められておりますので、県の地域機関、私ども佐渡地域振興局が中心になりまして、効果的な政策展開を図っていく上での、指針としてこの計画を定めたものでございますけれども、歴史文化と交流の島づくり、あるいは環境モデルの島づくり、そして企業チャレンジの島づくり、こういった3つの戦略テーマを掲げまして、この計画を定めたところでございます。

また今年には離島振興法が改正された年でもあります。ご案内のように離島振興法は昭和28年に制定されまして、離島の基礎条件の改善、社会基盤の整備等に成果をあげてきたところでございますが、今回の改正の特長は、今後の離島振興については、引き続き産業基盤や生活環境の整備を続けていきますけれども、それに加えまして地域の創意工夫を基本にした地域固有の資源を生かして、自立的な発展を目指すことが重要である。というのが今回の法改正の特長でございます。このような趣旨を踏まえながら、現在市町村の皆様からお出しいただきました案を元にしながら、県としての離島振興計画について、策定中でございます。

更に皆様のお手元にありますように、現在合併協議会において、新市の建設計画を策定してございます。ここにも3つの柱ということで、これからの佐渡として取り組んでいく方向性が掲載されておりますけれども、これからのまちづくり島づくりといった指針となるもの、そういうふうに使われます。

今申しました佐渡地域振興計画、離島振興計画、そして新市の建設計画。これらの3つの計画というのは期せずして、同じような時期に策定されます。そして計画期間も大体今後10年間ということのスパンの中でどういうふうに進めていこうか、ということでも一つの似たような計画になってございます。これらの計画の共通点は、地方分権の推進、あるいは自治体自身の政策能力や経営能力の向上といったもの、あるいは逼迫する財政への対応といったようなことが基本的な考え方になってくるかと思えます。計画の中身につきましても佐渡の現状と課題、あるいは目指すべき方向性について、基本的には共通の認識に立っていくものと考えられます。従いまして今後この3つの計画が相互に補完し合いながら新しい佐渡の島づくりを担っていくものという、そういう計画である、というふうに認識してございます。今日のセミナーもこれからのまちづくりという視点での趣旨でございます。こういったような計画が着実に実行されていくことが大切だというふうに思っております。

最後になりますが、本日までご参加の皆様におかれましては、このあとの美津島の松村町長のご講演、そしてパネリストによりますディスカッションを通しまして、佐渡の振興について考えるきっかけになりますよう祈念いたしまして、主催者としての挨拶に代えさせていただきたいと思えます。本日は大変ありがとうございました。よろしく願いいたします。(拍手)

司会：ありがとうございました。それではステージ上の皆様はいったんご退席をお願いいたします。

## 現況報告

司会：それでは現況報告に移らせていただきます。本日までご報告いただきますのは齋藤英夫(さいとうひでお)佐渡市町村合併協議会事務局長でございます。それでは齋藤事務局長よろしく願いいたします。

齋藤：佐渡市町村合併協議会事務局長の齋藤と申します。本日の『市町村合併公開セミナー まちづくりと市町村合併』の開催にあたりまして、協議会の動向についてご説明申し上げます。佐渡市町村合併協議会は本年1月7日佐渡の9市町村議会の議決を経て設置されました法定の合併協議会であります。その後2月24日に佐和田町の加入の申し入れを受けまして、3月13日島内10市町村議会において、可決されたことによりまして先程、会長の方からお話しがありましたように3月14日付けをもちまして佐渡島内全ての市町村によ

ります法定合併協議会となりました。

3月1日現在、全国的には法定協議会が239地域、989市町村であり、全国3,212の市町村の割合は30.2%という状況になっています。協議会の状況であります。学識経験者を含め30名の委員構成によりまして任意合併協議会での20回に及びます協議項目を基本としつつ、最終確認を協議会において行ってございまして、すでに法定協議会では5回目を数えております。協議会ではこのあと、調印が予定されている合併協定書に記載される合併協定の40項目の大項目を定めております。協議会ではこの40項目のうち28項目について最終確認を終えております。現在提案中の項目につきましては、新市の建設計画、「その2」の部分であります。それから市町村長等、特別職等の身分の取扱い、社会福祉協議会の取扱い、農林水産関係事業や商工観光関係事業の取扱い、等がありまして継続協議中の項目には町名字名の取扱いがあります。これらの項目につきましては3月29日に開催されます第6回目の協議会において協議されることとなります。

調整内容の概要につきましては、「未来佐渡」や協議会のホームページをはじめ各市町村の広報紙等で周知を図っております。特に重要な項目についてご報告をいたします。

まず、合併の期日につきましては、先程もお話がありましたように、16年3月1日。新市の名称については「佐渡市」ということになっております。事務所の位置につきましては合併時には金井町役場、将来庁舎を建設する場合には佐渡の中央に、ということで金井町の千種沖としております。議会議員の人数、任期につきましては、合併後4年間は定数特例を活用し、60人として佐渡全域を1選挙区として設置し、選挙を行うとともに議会議員の本来定数を30人としているところであります。また新市建設計画の審議を主な目的とします地域審議会については、旧市町村の区域ごとに平成26年3月31日までの10年間設置することにしております。この地域審議会の委員については、公募により選任されたもの5名以内を含め、15名以内をもって組織することにしてあります。重要項目については以上のような調整がなされております。なお、佐和田町が加入するにあたりましては、加入前に確認された協議内容については、遵守の上引き継ぐことを、3月16日に開催いたしました第5回目の協議会において確認をしております。

次に合併協定項目中、未協議の項目について説明をいたします。現在までのところ事務組織機構の取扱い、一部事務組合の取扱い、公共的団体等の取扱い、消防団の取扱い等が、未協議であります。速やかに事務的な調整を行い、次回協議会に提案をしていきたいと考えております。特に新市の建設計画については、財政計画等が未協議になっておりますが、基本方針についてはすでに協

議会で確認がなされており、また基本方針を実現するための施策については、第5回協議会で提案されておりますので、その概況について説明いたします。

新市の建設計画では新市ビジョン検討委員会で審議されました新市の将来構想に基づくものとなっております。すでに確認されました新市建設計画「その1」の構成といたしましては序章を含め5つの章で構成をされています。1番目といたしましては新市建設計画の策定の基本方針、佐渡のすがた、地方分権時代の対応等を踏まえた合併の必要性、それから佐渡の現状と課題、最後になりますが新市建設の基本方針等となっております。平成16年度から平成25年度までの10カ年の計画としております。特に佐渡の現状と課題についてはビジョン検討委員会、委員の70名の皆さんに検討していただいた結果をもとにしております。

新市建設の目標といたしましては、お手元のパンフレットの通り、3つの柱で構成をされておりますので、ご覧になっていただきたいと思います。現在協議会は新市建設計画「その2」の部分を提案しております。「その2」につきましては建設計画の主要部分でありまして、構成としては先程のパンフレットの通りであります。具体的な施策内容のほか、公共施設の適正配置と整備といった構成となっております。

また、新市建設計画「その3」の合併後10年間の新市における財政計画につきましては、次回の協議会に提案すべく佐和田町を含めて、事務調整中でありますので、もうしばらくお待ちになっていただきたいと思います。協議会において審議される新市の建設計画については以上のような構成となっております。計画期間10年を前期5年、後期5年に区分し、前期5年の事業計画につきましては概算事業費を明示するというようにしています。

以上主要な部分についての現状を説明いたしました。今後建設計画についての県との協議を整えて、各市町村においては合併協定項目の合意を踏まえ、廃置分合の議会議決をお願いすることにします。その後9月の県議会での廃置分合の議会決議をいただき、知事から総務大臣への届出を行い11月頃には総務大臣の官報告示を経て平成16年3月1日の合併の日程を迎える中で事務手続きを進めてまいりたいと考えております。合併協議の状況につきましては、協議会たよりやホームページ等で地域住民の皆様へなるべく早く分かりやすい情報を提供していきたいと考えております。

最後になりましたが今後ともご指導協力いただきますよう、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

司会：ありがとうございました。これで式典を終了させていただきます。なおこの後ビデオ上映の準備がありますので、しばらくお待ちください。

<ビデオ上映>

基調講演

司会：それでは続きまして基調講演に移らせていただきます。基調講演としてご講演いただきますのは松村良幸（まつむらよしゆき）、長崎県下県郡美津島町長です。

松村様はお手元のパンフレットでもご紹介しておりますが、美津島町長を務めるかたわら、全国離島振興協議会会長、財団法人日本離島センター理事長という要職に就いておられるほか、現在長崎県対馬6町の合併協議会委員という立場にもあられ、佐渡の合併協議会と同様、平成16年3月1日の合併に向けて準備をすすめておられます。また、松村様は平成12年の6月に両津市を会場に行われました「第15回全国離島交流ゲートボール大会」の際に大会会長として佐渡に来ておられまして、佐渡にはなじみがある方でいらっしゃいます。

本日は『離島振興と市町村合併』と題しましてお話しをいただきたいと思っております。それでは松村様よろしくお願いいいたします。皆様どうぞ大きな拍手でお迎えください。(拍手)

松村：皆さんこんにちは。只今ご紹介をいただきました姓は松村、名は良幸。長崎県では短足3人トリオと言いまして、私と硫黄島の池下町長と大島の秋山町長が、有名なもんでして全国になにか会をつくったらどうか、という提案が上がっておりますので、そのときには副会長ぐらいにしてもらおうと思っております。どうぞよろしくお願いいいたします。(拍手)

ご紹介があった対馬というのは、先程のビデオでも出ていたようですが、韓国まで49.5キロでございます。福岡、博多までが132キロと言われております。今までは絶海の孤島ということでございまして、昭和50年の10月10日に空路が開設されましてYS11というのが、金属音を響かせて飛来した時、まさにあの黒船が浦賀に来て、あの時の驚きと一緒に考えていただければいいかな、と思っております。それまでは韓国に近い絶海の孤島、玄界灘に浮かぶ島でございますので、もう対馬辺りでは何をしてもダメ。そのころ7万島民だったのが5万島民になって、今4万1,200ぐらいなんです。諦めの構図が蔓延いたしておりまして。ところが飛行機が飛来しましてから、やればできるんだという諦めの構図から、よみがえる島、という感じで島民の皆さんが妙な可能性を抱き始めまして、次から次に夢とロマンが青年団の中から、あるいは婦人会の中で、各界各層で常軌を逸するようなことになりました。今度



は国道に昇格しようかと、佐渡と一緒に国道に昇格いたしました。いろんなことがあったんですが、私もこの川口市長さんとは離島振興協議会でも会長になっていただいておりますし、何か難しいことがあったら、川口市長さんに相談いたしております。本当に両津市の皆さんは、川口さんみたいな素晴らしい行政マンを、そして政治家を選びすごいなあ、と私は感心し、感動いたしております。特にゲートボール大会ではあれだけの会場を見事に、パタパタとつくられましたね。まだ赤土が靴の底についていた、あの時を思い出しました。全国ゲートボール大会に参加された皆さんの語り草になっています。すごい大会を開催させていただきました。それから赤泊の村長さんも大先輩でおられますし、みんなそれぞれ1市7町2村のリーダーの皆さんにお世話になっております。

生年月日は昭和17年3月26日に私の意思には関わりなく、この世に生み出されまして、何を間違えたか57年の2月28日に前知事の高田勇知事と同日選挙で、町長に就任しまして、もう20数年経ちました。まあ、よくやっているもんだなあ、と自分ながら感心しているのですが。今日も実は種子島の副会長をなさっている、熊毛郡ですけど、あのロケットの日高實昭町長の町葬が一昨日ありまして、昨日種子島から鹿児島、福岡に着きまして、今日福岡から朝の1便で来まして。ここが終わると漁港協会の正副会長会とかが、東京でございまして、なんだかんだで帰るのは26、27日になると思うのですが。一種の旅人で、家内からは存在感はないし、子どもからは諦められているし、これは役場に帰ったら町長の椅子があるのかな、と思っているのですが。それぐらいあちこち飛び回っております。

今日は佐渡の皆さんの熱気あふれる会場に参りまして、やはり、離島は島の大小、風俗習慣は違いますが、抱えている問題は共通のものがございまして、私どもと佐渡は本当に良く似ているなあ、と思っています。私どもは小さい訳です。先程のナレーションでもやっておりましたように、佐渡が一番大きくて、次が奄美大島。私どもが確か709平方キロだったと思います。東西18キロ、南北82キロですから、これを国道道路距離に直しますと、120有余キロありまして、私どもの金子知事が「いやあ、対馬合併協ができたけれど、合併がなると思わなんだよ」という話をいたしておりましたが、今となってみれば本当によくなったなあ、と私も感慨深いものがございまして。

ちょうど私が就任したころ、57年は地方の時代といわれてもう10年くらいになっていたのですが、神奈川の長洲知事が、画一と集権の時代から、多様と分権の時代が始まったと。これはとりもなおさず地方の時代だと喝破いたしました。それから一村一品で有名な平松さんは、若者が地方に定住する時代が

地方の時代だと。私どもの長崎県の高田知事は地域自ら地域を経営する時代だと、こう3人3様に申しておりました。私どもは「いやいや、そんなに生易しいものではないよ」と。地方の時代とは「地域が地域を挙げて、政策を掲げて、しかも中央に迫る時代」であると、私どもは勝手なことを言っただけでございます。それから数10年。今地方分権がやっと芽を吹き始めました。たまたま国の財政がどうにもならないので、地方は地方で勝手にやれや、とは言いませんが、最小の投資で最大の効果をあげるという経営理念からいきますと、やはりいくつも町があって、「あその町には文化ホールがあるのに俺のところには何でないんだ」と言われると隣の町はつくらざるを得ません。あその町には町民体育館がある、やれ文化ホールが、やれ、音楽ホールや美術館、図書館が、と同じ物がつくられている。東京の中央から見ますと、地方は無駄遣いをしている、ということになる訳です。

とはいうものの、選挙があればどうしても町民の皆さんが要望するものを満たしてやろうとすることが人情ですし、そういうことが今までずっと行われてきました。ここにきてやっと、こういうことではどうなのかな、というようなことで、費用対効果というバカみたいな話が全国を駆け巡っていますが、ビーバイシーが1以上ないと新規事業はまかりならんと。誰がそんなことを言い出したのか分かりませんが。水産庁の費用対効果の委員に任命されまして、大学の先生は頭がいいですね。東大とか。私は福岡の地方の大学ですから、とても匹敵できませんが。4、5人の方と丁々発止の話をするんですけど、人件費も東京は高い、地価も東京が高い。ビーバイシーの計算でいきますと、離島とか辺地とか山間地というのは、マイナスで不利ですね。ビーバイシーが1以上の計算にならないと費用対効果上新規事業がまかりならない、というのはもったいのほかです。ビーバイシーが1にならなくても0.6でも0.7でもやるべきだと私は主張いたしました。なぜならば、定住促進、あるいは地域の振興、そういったものをどうして数値に表すんだ、と言うんです。その数値に表すことができないならば、例外のない法則は世の中ない訳ですから、1にならなくても、そういったものを例外として考えるべきではないかと。大いに主張をした訳でございますが、世の中というものは難しく考える人もおります。

私は物事の道理や心理とはそう難しいものではないと思うんですね。心理は単純にして明快、かつ共通のものだと思うんです。人の分からないことを言って、煙に巻く人が時折おりますけれど、特に偉そうな顔をした人ほど偉くないと私は言っているんですけど。特に偉い人は言いますね。「こういう高度な政治は君たちに話しても分からないよ」と。もったいのほかだと思えます。政治や行政は私たちの生活の延長線上にあるものだと思います。それを「君たちには分からないよ。これは政治のプロがやるんだよ」と。こういう政治をしても

らって困る訳ですね。こういうことが今までまかり通って来ました。

やはりこういう時代ですから、私が町長選に出た時は39歳だったのですが、私の周りでは汚職で町長が逮捕されるとか、その次の出直し町長が遅延工事30何件、未完成の工事に代金を払ってしまうとか、いろんなことがありまして、もう全く政治不信のつぼと化していたのが私どもの美津島町だったんです。私もやる気も自信もなかった訳ですけど、いろんな事情の中でやれと言われてまして、その時に、とにかく常識への挑戦と発想の転換、固定観念の打破というのを、政治理念に掲げて立候補いたしました。

ということは、とりもなおさず創意と工夫を図ることだと。ということで常に自分を剣が峰に追い込みました。そうしないと知恵も出ないしエネルギーも出ないですね。後がない訳ですから、有言実行というやつでやってまいったんです。不言実行はいいですね。いろんなことをできそうになってから「今度、こうやる」と言えばできる訳ですから。できない前から「こういう事をやりますよ、皆さんどうですか」ということは常に自分を断崖絶壁に立たせている訳ですから、後がないので進む以外ないんです。生きようと思えば。対馬というところは火山帯のないところですから、温泉も出ない。温泉があったらなあ、と。よく調べてみましたら、冷泉は出るはずだと。ランドサットという衛星探査の方法があるんですが、有望なのでやってみよう。1億創生で温泉掘りをしたのですが、その時も実は、小島清次郎という議長がおられたんですが、「議長、俺もそろそろ年貢の納め時が来たようだから、辞表を書いておきますよ。温泉が出なったら私辞めますので、掘ってみましょう」ということで、「やってみましょう」と。辞表を議長に預けまして、温泉を掘りました。

第3紀層だから大丈夫だろうと、思いながらも、いやいや、これはどうだかなと。試掘をしたり、余分な金も使いましたけれど。そうするとプレッシャーがひどいんですね。お年寄りの、しかもしいたけの天皇賞を取ったような人から、選挙のしこりはいろいろありますから、大合唱になりました。「俺らは小学校のころから教科書で習っている。火山脈のない火山帯の通っていないところには温泉が出るはずがない。バカ町長がアメリカまで掘っても出るもんか」。こういう大合唱が起こりまして、これで年貢の納め時だね、ということだったんですが、やっぱり神は自ら助けるものを助ける、でですね、出たんですね。そしたら議長が曰く。「おい、町長、あんた運がいいばい」と。「なんで運がいいんですか」と聞いたら「もう辞表を破っておくよ。もう良からう。辞めんで」。「出ない時は辞めるで、そら、そうじゃないね」と笑ったんですが、そうしたら、「運がいい男ばい」と言う。「私が運がいいんですか。私だけじゃないでしょ」。私は、「議長、あなたが議決しなければ100円も使えないじゃないです

か。あなたも議決をされて全議会でやれ、と言われたじゃないですか。議会もやろうとやってやったんだから私が辞めたら、議会も解散してしまわなければならないから、あなた方も運が良かったんですよ」と言うと、「おお、そうじゃの」ということで終わりましたが、常にそういったことで不退転の決意でやっていくと本当にできるものですねえ。つくづくそんな気がいたしております。

まさに、離島振興法がそうだったんですが、本当に佐渡の皆さんが頑張っていたし、離島の議長会の先生方も大変なこととして、都道府県の離対協、離島のある都道府県でつくるのが離島対策協議会です。離島の市町村でつくるのが離島振興協議会、また、離島の県の議会だけでつくる県議会の協議会もございまして、離対協、離島振興協議会、離島の議長会、三位一体、四位一体になったんですが、3年前はもう離島振興はいいじゃないかというのが蔓延しておりました。ご承知のように、しまなみ海道は8千億くらいかかったのでしょうかね。3本橋が架かって、道路ができましたが。道路で30分40分行った先はすごい道路だし、ホールも輝いているし、きらきらしているし。ところが本土側のみすぼらしいのを見られて、もう離島はやりすぎで、いいじゃないかということと、中央からは我々の税金を地方や離島が使っている、と大合唱になりまして、離島振興の延長はならないな、というのが3年前の状況でした。国会の先生方にも、もういいのでは、というのがみなぎっていました。それを見て、これではいかな、と。今までは離島振興というのはご承知の通り、国土の均衡ある発展ということで、それが一つの使命でしたね。

最初の離島振興ができた時は「島に水と光を」ということで島に水をくれ、光をくれ、水道と電気を、というのが始まりでした。しかし現在になりまして、第5回目を迎えようという時には、そういう状況の中で大合唱でした。「いや、そうじゃないんだ。離島がある限り離島振興は永遠だ」と、私は思っています。ということは、本土と離島の距離をゼロにすることが離島振興だと私は思っております。物理的にゼロにはできません。しかし制度的にはできるはずであります。例えば極端な話をしますと、本土の100キロを輸送コストが仮に1,000円かかったとします。海上100キロが1,200円と仮定した場合、200円分を助成をしていく。これですと本土と離島の距離は制度的にはゼロになるんですね。そういったふうに今までは国土の均衡ある発展ということでしたけれど、やはりこれからは人それぞれに顔が違いますように、島によっても顔が違いますね。風俗習慣も違います。個性化ということが今回の離島振興の大きな主眼だった訳であります。離島に住むことが輝いていて、元気だ、そういう島を創出しようということが、今回の離島振興でございまして。地方分権の時代から申しまして、私どもや皆さんで頑張った新離振法というのが、

これから離島の振興に大いに役立つと思います。

まず、国の考えを直していただきました。直していただいたというより、国はもともとそう思っていたと思うんですけど。離島開発センターや離島を開発してやろう、困ったもんだ、離島をどうにかしてやろう、というお荷物的な考えがどこかにあったのではないかと。4兆円を超える国費をつぎ込んで、確かにハード面は良くなりましたが、過疎化はどんどん進んでおります。全国の離島で110万前後あった人口が今は50万を切ろうといたしております。229市町村です。これはなぜかと言いますと、総務省の吉山局長さんをはじめ、国土交通省の都市地域整備局長である浚井（さらい）局長、坂山審議官、いろんな方と丁々発止の議論をしました。とにかく平成8年の海洋条約発効以来、200海里が定着いたしましたけれど、島があるからそれだけ専管水域も考えていきますと。皆さん考えて下さい。島があるから国土の37万平方キロの面積が約12倍も増えるんです。海底貴金属、あるいは石油、ガス、水産資源、海洋資源からいえば、大変なものだと思うんです。だから決して島はお荷物ではない。宝島だと発想を持ってもらわないかん。私どもも私どもで、国からもらうものは何でももらわなければいかん、ということでダボハゼのように飛びついてきた。こういったことも私どもは考え直さなければいかん。やはり国益に寄与する島のあり方ということも私どもは考えなければいかん。やはり国と島がそれぞれビヘイビアを改めるべきではないかということが、今度の離島振興法の、目的の項にはっきりとそれができました。国の外縁を形成する重要な島しょということで離島振興の目的にはっきりと、国益に寄与する島、ということが謳われました。

更にもう一つ違うことは、今まで国がつくっていた離島振興法を国は基本方針だけを示し、そして、私ども島の市町村が、振興計画をつくる。それに基づいて県が決定をする、ということで離島振興もこの4月1日から新しい出発をする訳でございますが、これからの離島というのはそういった点では、輝く元気な島の創出ということは個性化を目指すことでできると思います。もちろん理念の中にも個性化ということが大きく出ていますので、価値のある地域の差をつくり出そうという、価値ある地域差の創出。これが離島振興の理念でもありますし、地方分権にも通じる要諦でもあろうかと思うんです。そういった形で今回地方分権の受け皿ということで合併が取り沙汰されているのですが。私どもは実際、合併はしたくないですね。私たちの先達が嘗々として、各地域でそれぞれの町を、地域をつくってきました。できるならばこういった形でそれぞれの創意と工夫で、いい島の生活、いい町の生活ができると思っている訳ですが、やはり時代の流れといいましようか、国に金がない。しかも地方分権で

とりあえず1,000くらいの市をつくろうということでございますので、その後には都道府県をどうするかということが出てくる訳でございますが。

今、地方自治が市町村と都道府県の2層制ということが言われていることは、皆さんよく言われている通りでございますけれど、今まで都道府県が国の大臣のほとんど仕事をしていたということですね。果たして地方自治体なのだろうかという疑問を皆さん持たれていたことだろうと思います。機関委任事務というのが80数%あった訳ですから。これが法定事務、一般事務になってくる訳ですが。そういった論議も背後にはある訳でございます。しかしよく考えてみますと、ほとんど自主財源が1割、2割。10%を切るようなところもございます。ほとんどが島の場合そういったことでございます。そういった場合ほとんど交付税の財源ですね。交付税というのはご承知のように、この町をこれだけの行政を運営していく上においては、この行政事業に対して財政はこれだけ要りますよ、という税金、その他の収入を差し引いた、財政需要からその町の収入を差し引いたものが交付税で来る訳です。これは一般財源ですね。これは難しく言えば測定単位費用の計算といってずっと積み上げていくんです。人口がいくら、公共の学校がいくら、道路の延長がいくら、ということですね。そういった測定単位表の計算を財政担当がやりまして、その結果出た、例えば基準財政需要額というんですが、これが30億と出たとします。税金、その他の収入が5億しかなかったとすると、25億が交付税で市町村に来る訳です。それでもって各市町村長がいろんな地域経営をやっていく訳でございますが。それがだめだということになると皆さんのニーズ要望に応えられなくなるんですね。今回、合併特例債というのが出ましたけれど、向こう10年あるいは15年間はこの交付税は何とか確保しようということですが、これも考えていくといろいろなことがある訳です。私どもの行財政運営の根幹になるものが交付税でございますので、外堀、内堀が埋まると考えざるを得ない訳ですね。避けて通れないという言葉をよくいたしますが、私たちも避けて通れないということで対馬の場合も苦渋の選択をいたしました。本当に最初から6町を一緒にしたら良かったのか。あるいは2つくらいにしてそれから1つにしたら良かったのか。いろいろな考えがありました。しかし、島トータルが良くならなければ、各地域が良くなれないと、ということになりますと、どうしても苦渋の選択をせざるを得ないということになります。

法定合併協議会ができる前に私ども、1年間、合併研究会というものを私ども町長、議長、対馬支庁、長崎県庁のここの佐渡振興局と同じ振興局、支庁長を中に入れまして、6町長と議会とで研究会を始めました。1年経って、やらざるを得ないと。合併協議会の会長というのはだいたい町村会の会長になるんですが、私になっちゃあどうかな、と。私はやはり黒子に徹するべきだと思

ました。当時埼玉の合併が上がっておりまして、その時合併協議会の会長に副官房長をなさっていた、石原信雄さんを迎えました。そういった前例がありましたから。諸悪の根源は対馬の中でも全て美津島町にあると思われておりましたから、またいつ、私がすれば、我が田に水を引くようなことをするんじゃないかと、まともにしてもそう思われますから、これはうまくいかないな、と。私はやるべきじゃないな、ということでですね。

長崎県は79市町村があるんですけれど、そこの地方課長をしていました方が副知事をなされまして、副知事をお辞めになって外郭の閑職におられましたので、この副知事を引き出そうと。美津島の財政状況も6町のことも良く知っておられましたので、実は裏で黒子が表に出ずに何とか、合併協議会の委員になっていただき、会長になっていただいたんです。副会長は町村長の中からせにゃあいかん。その時合併協議会の準備室が峰町という島の中央にありましたので、峰の町長というのは2期目なんですけど、管理者をしています。私ども老人ホーム、消防、介護保険、こういった130名くらいの組織がもう一つありますが、まあ、7町あると変わらないんですが、ここでも50億くらいの予算を組みますので、ゴミの処理もやりますし、ここの管理者が峰の町長にしているものですから。峰の町長というのは「対馬は一つ」ということをスローガンに掲げて町長選挙にも出ていましたから、こうした合併論議の起こらない内に、これは峰の町長がいいな、と。ちょうど事務局も峰町にありましたから、そうすると1時間ちょっとで巖原からも上対馬から、一番端から来るもんですから、副会長に峰の町長になっていただいて進めてきた訳です。進めてきた訳ですが、いろいろな紆余曲折がありました。特に本庁所在地が大変な問題でした。

佐渡も本庁所在地で大変な激論があったということも聞いております。対馬の場合、端から端まで2時間半、3時間という状況でございますので、韓国に近い方の上対馬町、上県町というところは、「本庁舎は中央に置くべきだ」と。

「峰か豊玉に置くべきだ」と。巖原町は鎌倉時代から700年も続いた大名の城下町でありますので、「巖原をおいて本庁所在地はない」と。勿論人口も1万6千を切りましたけれど。社会基盤の整備も250床からの病院、国の出先、県の出先、社会基盤の整備という点では群を抜いておりますので。そういうことで、合併の綱が切れそうになるんです。小委員会をつくったりして、特にこの問題は協定項目が43項目もあるものですから時間がかかったようです。それで最終的には激論になりましてフィフティフィフティになるんですね。真中に置くべきだというところとやっぱり巖原だというところと。

それで、まず合併ありきでする以外はないと。これも苦渋の選択をせんじゃ

ないかと、いうことで、暫定的に役場本庁舎を巖原町に置くことになった訳です。暫定的というのはいつまでかということが出てきます。対馬の場合は、変わった方式をしまして、南北に長い島ですから、大変でして、少し対馬の形態を考え直して、支所機能を充実させようと住民の皆さんには「今までと一緒に一つも変わりませんよ」と。逆に合併して良かったということにならなければいけないんだから。今、郵政省のワンストップ事業となっていますけれど、わざわざ役場まで来なくてもいいように郵便局から住民票、戸籍謄本、戸籍抄本、印鑑証明、を取れるようにしよう。いろいろなことをしまして、最終的に考え方としては、ロシアの、ソ連邦の主権国家方式を考えようということです。それぞれ支所にある程度の権能、権限を持たせて、本庁舎というのはコントロールタワーでいいじゃないかと。司令室だけでいいじゃないかと。いうことで極端に言えば、人事を扱う総務部、農林水産、商工観光、こういったものを含めた、島のグランドデザイン、計画をつくる企画部門、あとは税を含めた財務部門。福祉事務所はどっちみち義務付けられますから。こういう40名から50名のコントロールタワーを置く。これは本庁舎でいいじゃないかと。ということになった訳です。

今そういうことで進んでいるんですが、皆さんそれぞれ面白いもんですね。旧町意識が抜けないんですね。喉もと過ぎれば熱さを忘れる、という言葉がありますが、「我が町に、我が町に」ということで決まったら、今度は庁舎が狭い、会議室がなくなる、プレハブの庁舎をつくらにゃいかん、これは5億3千万かかる、駐車場は1,500万借り入れがかかる、造成したらこうなる、と次から次と出てくる訳ですね。

いろいろなことがやっぱりあります。開闢(かいびやく)以来のことが行われようとする訳ですから、佐渡も対馬も一緒だと思います。全く今までの歴史をひっくり返しますので抵抗もありますし、いろいろな試行錯誤がある訳ですが。やはり、何だかんだいいましても、互惠互助の精神がないと合併はできないということですね。我が田に水を引く旧町意識を持っていたら、これは絶対ダメですね。しかしそれが捨てられるか、これがまた難しい。しかし捨てないと生き残れない。住民の皆さんに、不便をかける。最終的に責任を取るだけではすまなくなる。やはり、お互いが足りないところを補い合い、補完をし合い、譲り合いながら、やっぱり恵み合い、互惠互助でないといけないな、とつくづく思いますね。

合併をしたら、皆さんが知恵を出し合うスタイルにしていかなければいかんが、旧町意識をどう払拭するか、これがまた、新しい市が誕生したあと、大変だと思うんですね。私ども対馬の場合は各旧町に支所を置くようになっております。もちろんその支所には地域審議会なるものを置いて、民意を反映させよ



うということであり、支所長は住民の皆さんが安心して当分の間特別職として置くと。そういうことで最大公約数が出ている訳です。

ここで今話すことははじめて話す事であり、対馬の皆さんが聞いたら怒ると思います。仮に新市の市長がどうするか分かりませんが、新市のドクトリンが出る訳でしょうが、合併協議会の意向を新市長は尊重しなければいけませんから、執行権の範疇の中で可能な限り尊重していくと思うのですが。例えば上対馬町、上県町、峰町、豊玉町、水島町、厳原町と6町ある訳ですが、合併協議会の中でも論議されている。それは町村長の延命策ではないか、ということが出ました。「町長が支所長となりそれを特別職といっているんだらう」というものができました。「そんなことはない。それは新市の市長が選ぶんですから」と言ったら、「それなら所長に助役になるのか」と言われ、「それは課長になるかも分かりません」。とにかくいろんな疑心暗鬼も出てきます。まあ、支所長という特別職を置くことに決まりました。

そうすると、新市になって、新市の将来像と重点的な取り組みとということで、「アジアに発信する歴史海道対馬」という大きく都市の未来像を掲げている訳ですが、エリアをいくつかに分けております。ところが上対馬の支所長候補ができます。ずっと上に上がって、峰、豊玉、美津島、厳原の支所長候補が出ると、新市の市長のさじ加減がここで問題になってくる訳ですね。上対馬の町長であったり助役であったり、また上対馬の支所長に置けば、あとは峰も豊玉も美津島も厳原も、みな一緒ですね。それぞれの町の町長なり、助役なり、課長なり、あるいは民間なりをおけば、どうなります？そんなことをしたらいつまで経っても旧町意識は抜けませんよ。しかし皆さんは今のところそう思っているようです。しかし早く一つの対馬市として、島トータルとしてのいろいろな振興策をとっていかなければいけませんから。我が町意識、旧町意識を出していたらそうはなりませんよ。それをどうするかということです。

例えば具体的にはケーブルテレビです。実は私どもの町が昭和57年にCATV実施検討委員会をつくりまして、10年かかって約12億をかけまして双方向の多元情報システムをつくり上げ、全世帯に引いたんですが、最初はいろいろありましたが、これを対馬全島にするというと80億から100億かかると思うんです。でもこれはやっていかなければならないと思うんです。これによって対馬島内の電話はゼロになります。NTTは怒るか分かりません。そういった光ケーブルを引きましてCATVを導入しますと、市内電話は無料になりますね。これも一つの大きなメリットだと思います。いろんなことがたくさん考えられますよ。

今、私どもはマグロの養殖を盛んにやっています。5千匹くらいやっている一つの業者もいます。オーストラリアは1年足らずで10キロ、8キロのもの

を1年足らずで、養殖していますけれど。3年かかって30キロ、40キロを出荷するんですが。これはヨコワという黒マグロの子が捕れますから、それを養殖するんですけど、キロ4千円くらいでいくと思います。「トコの腹の子」の名で出しているようですが。こういったことが大々的にできるようになります。ヨコワというのはご承知の通り、上唇にかけますと死にます。横の唇にかけるんです。非常に難しいんですが。今からいろんなことができてくると思うんです。

ケーブルテレビをなぜ美津島町が導入したかということ、先程言いましたいろいろな政治不信がありまして、「側溝のドロがつまった、直しにこんか」。極論をしますと当時は、行政とはこんなものだと思っていたんですね。言いたい放題、したい放題、行政不信。「お前ら、誰のおかげで給料をもらっているんだ」と、職員に対してこんなことでした。これは情報の共有がならない限りまちづくりはできないなあ、情報知識の共有ということでケーブルテレビを入れましたが、これは公私共に良かったです。私の情報発信も皆さんにくまなく伝わりますし、皆さんの声もくまなく伝わります。それで20何年間も6期も町長するということで。幸か不幸か分からないんですが。とにかく今まではカメラを向けられますとVサインをつくったり、老若男女問わずやっていたのですが、今は私たちの町の人にはカメラが来てもたじろぎもしません。文化の活性化、といえはそれまでですが、大きく変わったのは女性の皆さんがきれいになりましたね。今までは婦人会の会合だ、公民館の会合だ、生活改善だということで、エプロンを外して、さっと会場に駆けつけていましたけれど、必ず、まず鏡に向かって、非常にセンスが良くなりましたし、きれいになりました。こんなに違うのかなあ、と思います。冗談はともかくといたしまして、本当にケーブルテレビというのはこれから必要なものだと思います。茶の間で議会も見られます。そうしますと、議事者席に座る職員も緊張感が漂っていますよ。こんなに書類を抱えていきますから。議会の先生方も真剣そのものです。これはやっぱり常に緊張感がないところにはいい仕事できませんのでね。

美津島は変わっていくと思います。モータリゼーションの時代ですけど、国道筋に年間50億の流通集積ができていますよ。ちょうど佐和田町のような状況が美津島町で起こっている。だから私はいつでも控えめにしておかなければならない羽目になってしまうんです。50億というのは大変なことです。食料品、日用品。大店法が改正されまして、商工会の理事さん会長以下が来られて「長田という大型店をストップせい」と言うんです。私は「それをするにはできません。あなた方の町長ではないし。皆さんが喜ばれることをするのが町長の役割ですから。今まで物価も3割高、2割高。衣料費については

4割も高いという中で、皆さん新鮮でいいものが揃うということで待っている訳です。皆さん迎え撃てばいいじゃないですか。今まで美津島町だけの商圈で生きてきたけれど、全島に拡大すればいいじゃないですか」ということで、スタートし、その名前がパロ21ということで商店会の7人の侍でつくったんですが。お金がないというものですから10億の近代化資金のうち1億7千万用地費を出し、そこに町が山を買って、土地を造成してつくりました。ちょうど大型店の斜め向かいになるのですが。ここでやはり今売上げが4倍、5倍になっています。その時皆さんが言いました。「こんな小さな島にそんな2つも。他に既存の美津島マルエイというのがございまして。2つも3つも今に潰れるよ。」「小さな島にあれだけの大型店のパル21と長田グループ。これはどっちかが潰れるよ。今に見てみい」ということでした。

やはり経済の原理原則からいくと潰れないんですね。今までの流通は商品を出すことで、やはり人の集まる場所をいかにつくるかということですから。2つが競争するから絶対潰れないよ。競争に参加しないところが潰れていくから心配ないよ、と啖呵を切ったものの、少し不安でした。しかし、経済のプリンシパル原理原則からいいますと、これは当然ですから。皆様ご承知のように、火事場のクソ力というのがありますね。火事と喧嘩は江戸の花、といいますが、火事場と喧嘩場には人が集まるのですから。

だから対馬の大阪や東京や福岡に出ている人が、お盆や正月に帰ってくると、「対馬は物価が安いねえ。何でだろう。ティッシュペーパー5箱で160円、170円はどこにもないよ、大阪にも東京にも」と言うんです。そうじゃないんですね。とにかく競争していますから。アイスクリームも常に半額ですよ。それを目玉商品としてやるんですから。だからいまだにしのぎを削って、50億の流通集積です。そして競争に参加しきれなかった美津島マルエイというのが倒産していきました。今それで、ずっとやっている。モータリゼーションの時代といいながらも、本土でも島でも変わらなくなりました。郊外のパチンコも同じでございまして。私たちが時代の流れに背を向けるのも考えようだと思います。どうか互惠互助の精神でそれぞれの先人先達が築いてきたノスタルジー郷愁というのがあるでしょうけれどもやはり、佐渡全体、対馬全体が良くなることによって各地域が良くなる。こういった時代は各地域がいろいろやっても無駄が多くなります。

佐渡の賢明な議会の議長先生はじめ、リーダーの方がお集まりなんですから、申し上げるまでもない訳ですが、やはり我々行政政治というのは、先程の費用対効果ではありませんけれども、そんな費用対効果のビーバイシーが1以上なければならぬなんてことを言っておいたら、いいところばかり栄える。辺鄙

なところはどんどん埋没していく。そういったことは許されない訳ですから。それは政治の根幹を揺るがすことになる訳ですから。光の当たらない所に光を当てる。これが政治であり、行政であろうと思います。そんな東京のような当たっているところに当てる必要はないんですから。

だから私どもは島を挙げて中央に攻め上る時代が来た、ということは大きな相手に戦いを挑むには、小さな力を大きくするには、一つになってできる訳ですから、だから私ども離島振興協議会229市町村も、マイノリティ少数ですけども、これが力を合わせるから国が予算をつくる時には、離島振興協議会はどんな動きをするんだろうと、各省庁は見ております。その後に国会議員の先生方が続きますから、常にそういったことで私どもが一つになれば強くなる訳ですから。行政の目的というのは、最小の投資で最大の効果をあげる。私どもの目的は住民福祉のサービスの追及ですし、企業は1円でも多くの利益を追求する。それを税金という形で社会に還元をする。私どもはより一層の住民サービスの追求をしていく。これが為政者の役割でございますので、その目的は違ってもその目的のためにやることは一緒だと思います。最小の投資で最大の効果をあげる、ということになれば、合併は避けて通れないのかな、とこのように思って歩いております。

訳の分からない話をいたしましたけれど、参考になればと思います。長時間ありがとうございました。(拍手)

司会：松村様、どうもありがとうございました。今一度大きな拍手をお送りください。これにて基調講演を終了いたします。

## パネルトーク

司会：皆様お待たせいたしました。それではこれよりパネルディスカッションを始めさせていただきます。さっそくパネリストの皆様にご登場いただきましょう。皆様の詳しいプロフィールにつきましては、お手元のプログラムをご参照ください。まず基調講演でご講演いただきました松村良幸様です。(拍手) 続きまして両津市長でいらっしゃる川口徳一(かわぐちとくいち)様です。(拍手) 次に佐渡総合病院長でいらっしゃる服部晃(はっとりあきら)様です。(拍手) そして佐渡青年会議所理事長でいらっしゃる小田拓哉(おだたくや)様です。続きまして新潟県農村地域生活アドバイザーでいらっしゃる佐々木和子(ささきかずこ)様です。(拍手) 続きまして「新市の未来を考える会」でいらっしゃいます塚本健二(つかもとけんじ)様です。そして本日コーディネータ

一を務めますのは、新潟日報社編集委員室長望月迪洋（もちづきみちひろ）様です。（拍手）本日は『市町村合併から始まる私たちのまちづくり、島づくり』というテーマでお話し合いをいただき、ご意見などを頂戴できればと考えております。それでは望月様よろしくお願いいいたします。

望月：はい。それでは今日の最後になりましたが、さっそくパネルトークに移らせていただきたいと思います。その前に私のほうから6人のパネリストの方をご紹介させていただきたいと思います。一番舞台左手から、「新市の未来を考える会」の塚本健二さんです。（拍手）更に新潟県農村地域生活アドバイザー佐々木和子さんです。（拍手）それから佐渡JC理事長小田拓哉さんです。

小田：こんにちは。（拍手）

望月：佐渡合併協議会の副会長でもありますが、佐渡総合病院長服部晃さんです。（拍手）更に同じく合併協議会副会長をされています両津市長川口徳一さんです。最後になりましたが、先程「離島振興と市町村合併」でお話しをいただいた対馬美津島町長の松村さんです。（拍手）

以上6人の方でこれから1時間半、90分に渡って市町村合併によって始まるこれからの島づくり、地域づくりを話し合っていきたいと思います。まず先程の松村さんのお話は、佐渡にとっては引きつけても、示唆に富むテーマが多かったように私は聞きました。その中でも改めて松村さんに話して敷衍していただきたいんですけど、島が一つにまとまって合併をするという大きな作業をなし遂げていく上で、松村さんにとって何が一番大変だったか、おっしゃっていただきましょうか。

松村：そうですね。最大公約数をどうやってつくっていくということですから、誰かが黒子にならなければいかんですが、黒子に徹するという事は非常に難しいですね。やはり本庁所在地をどこにするかが、一番大変なことだったですね。それで、極端なことをさっき言いましたように、「ソビエト方式で、主権国家で連邦政府だと。だから連邦政府は別にあんたら綱引きするんだったら連邦政府を長崎県庁の横に持っていてもいい。長崎だっていいじゃない」と言ったら、バカなことをいう町長だと怒られましてね。それだけを反対する人は、「あの町村会長のバカ町長は、本庁舎を長崎に持っていけばいい、といった」と。前後を外して言いますからねえ。前後を外して言いますと、本当にバカなことを言うやつだなあ、と。いろいろそういったこと、大変でしたな。

望月：なるほど。私は松村さんのお話を聞いていて、一つなるほどと思ったのは、離島振興に限られるわけではないんですけど、市町村合併という大きな作業を進めていく上で、住民に対して行政側がどういうサクセスストーリー、先に向けての夢を、明るい気持ちをつくることができるか、そのためのストーリーを行政がどれだけきちんと明示できるか、これはかなり大事だったように思いますけれど、対馬の場合、「アジアに発信する歴史海道対馬」。これは一つ短いフレーズの中で、これから対馬の持っていた歴史の長さ、700年、800年の中で日韓の、日本と朝鮮半島の交流の中で対馬の発した役割を思い起こしながら、離島は日本のお荷物ではなくて、宝なんだ。こういうメッセージを込めた形があるように思いますけれど。いかがでしょう。

松村：そうですね。私どもは2千年の日韓交流の歴史がありますし、秀吉の出征以来、徳川幕府になりまして、徳川の政権が交替するたびに12回、李王朝から通信使が来ているんです。遣韓使は毎年だったんですけど。そういった中でも外交はいろいろございまして、国書改ざんまでしたことがあるんですね。対馬藩がですね。李王朝と徳川幕府の間に立って。国書改ざんをしてまで両国の平和を希求したという。それは新井白石と同門だった雨森芳洲。白石は幕府に残り、彼は朝鮮との交易のことをやったんですね。その時の「欺かず、争わず」という精神の交わり。今にも通じるような外交理念を雨森芳洲はもっていた。これは盧泰愚の時の、宮中晩餐会の時にその話が出まして、それが外交の基本になったようですし、第14代の薩摩焼きの陶工沈寿官、彼が対馬を窓口にしていた外交の時は、平和だった。しかし、明治政府になって、東京に外交の場が移るようになって、全く外交の話がふさがったと。こんな話をしていました。両国の間にあった文化の廻廊としても、これは役割を果たしてきたと思っています。

望月：ありがとうございました。歴史の点から言いますと、対馬も佐渡も日本の歴史の中で果たした役割というのはかなり大きなものがある訳ですけど、そういう意味で対馬が提示したフレーズというのは、佐渡にとっても大きな参考が一つ出てくるんだろうという気がします。

さて、佐渡の問題に引き付けまして、5人の方にそれぞれ出していただきたいのですが。任意の合併協議会がスタートしてから、佐渡の合併協議会もいくつかの紆余曲折がありました。先程齋藤事務局長が提示された中でも、網羅されている訳ですけど、こうした2年余にわたる流れをこのパネリストがそれぞれの立場でどういうふうに理解し、咀嚼し、その上でこの先の合併に向けての課題としてどういう形で一番強く意識されておられるのか。その点を各パネ

リストから出していただきたいと思いますが、まず、行政を預かる責任者の一人であります、川口さんからお話をいただけますか。

川口：はい。先程は私どもの離島のリーダーであります松村会長から貴重な合併に関してのご講演をお聞きしたところでございます。私は相対的には全くこの佐渡島と合併が似ているなあ、そういう経過を辿っているなあ、とそういう感じを受けたところでございます。やはり合併ということになりますと、島以外の本土にいる人たちからみれば、なぜ島は一つになれないのか、島は一つであるよ、こういうことを常々言われている訳であります。しかし私ども佐渡に住む島民にとっては、そしてまた行政を預かる私どもといたしましては、この佐渡には10か市町村があるんだと。この10か市町村をまとめるのが合併でございますけれども、なかなか、過去の経過等がございまして、一つにはなりにくいという市町村の壁があった訳でございます。

がしかし、歴史を振り返ってみれば、やはり今会長さんが言われましたように以前は、佐渡は一つでありましたから一つになれない理由はないのではないかと、こう思っておるところでございます。勿論この合併というのは言い換えれば、私たち行政の首長、議会の議長さんのための合併ではないと思っております。全てはこの島を担う子どもたち、あるいは孫やひ孫たちの将来の島をどうつくり上げていくか、そしてまた、産業を振興していくか。その辺に私ども行政に携わる者は考えていかなければならない。そしてまた、住民の考えを素直に受け入れながら、住民のための行政をいかにつくり上げていくかということでもあります。

私もこの15年度の当初予算をつくらせていただいて実は明後日、本会議で議決をいただくわけでございます。非常に難儀をしたのは今の国からの交付税の中身でございます。昨年よりも1%積極予算を組みましたけれど、現実的には合併の経費等差し引きますと、マイナス予算であったと。

こういうことはやはり、交付税が昨年よりも2億5千万ばかり少なくなっている。あるいは収税等が落ち込んでいる。こういう予算組みになった訳でございます。こういうことを考えますとやはり私どもは合併をして何とか行政のスリム化とか、中身のコスト的なものも考えていかなければならないな、と思っております。

合併ありき、というふうに捉えますけれども、そうではなくて、合併は一つの島づくりの手段であると、こういう考え方である訳でございます。こういう意味では先程もお話しを聞きましたように、合併するについて私らが一番難儀をしたといえますか、10か市町村の拠点となる庁舎位置については、同じような経過がある訳でございます。そんなことを先程の講演をお聞きして感じた

ところでございます。

望月：はい、ありがとうございます。合併は目的ではなくて、島の活性化、島づくりのための一つの道筋、手段であるというお話だったと思います。服部院長いかがでしょう。

服部：私は医療人という立場から先程のご講演を拝聴いたしまして、医療人の立場からご質問と、私のお話を少し聞いていただきたいと思います。対馬のことは知らないのですが、対馬の地勢と申しますか山とか平原とか、そういうことに関してどうなのでしょう。平らな場所でございますか。それとも佐渡のように1千メートルクラスの山が2つあって、3カ所か4カ所くらいの地域に分かれているところでございますか。

松村：山林面積約87%。山ばかりでございます。耕地面積はほとんどありません。だから地価も、城下町であります巖原町のメインストリートは坪100万もします。そういうところでございます。

服部：それから医師の充足率、医師の数、病院の数、病院の分布、その病院が町立病院であるのか、あるいは他の民間病院が多いのか、についても教えていただければと思います。

松村：はい。開業医の方が非常に少なく、ほとんどは入院形態をとらない開業医の方です。上対馬町という対馬の北の方に一つ、約80床、実際は100床なんですが、離島医療保険病院ということで県と長崎県の市町村で、離島医療保険組合というのをつくりまして、一部事務組合ですが、そこで80床から100床の上対馬病院。私どもの町で国立病院だったものを4～5年前になりますかね。これを私どもが移譲を受けまして、離島医療保険病院に加入をし、ここが約150床、それからメインの巖原町が250床。精神科などいろんなものを入れてですけど。こういう3つの病院です。医師の充足率からいくと全国平均を下回っております。

服部：あとで述べられた2つの病院というのは町立でございますか。あるいは島立でございますか。

松村：離島医療保険で各町が、財源をやっていきます。だから交付税であるとか病院債という起債を医療保険組合でやります。



服部：分かりました。その病院の状態が合併に際して促進の方向に働いたのか、あるいは阻害方向に働いたのかあるいは関係なかったのか。それについてお尋ねしたい。

松村：そうですね。今、3病院は一つの市になりますから。離島保険組合の会長というのが知事なんです。そして各医療保険病院のあるところの町村長が理事長なんです。今度は1対馬市になりますから3病院が一つの市の理事長になる訳ですね。それをそれぞれ機能の分担、人事の交流を3病院で始めてもらっています。それに一人、合併してから代わってもらいました。

服部：なるほどありがとうございました。それで私これまで新市ビジョン、現在の、法定協議会のメンバーの一員として日頃考えておりますことを、申し上げさせていただきます。

新市になったからには現在の医療のレベルを上げなければならないと。医療の質に対する期待に応えなければならない、と思っております。それから救急体制につきましては消防隊との関連でもっと速く、スタッフの多い病院に行きたいという要望が強い。慢性疫に関しましてはやはり地元の病院、あるいは地元の診療所で診療を受けたいというような希望が出ております。

そういうことを達成するためにどんな問題点があるかと、私なりに考えてみますと、簡単に言いまして一つは医師不足でございます。新潟県自体は全国44の都道府県中下から3番目か4番目という、医師不足の状況でございます。新潟県の中でも保健所区域別に比較しますと、佐渡は柏崎と上越に並んだ低い方です。その中で私どもの佐渡には医師の方が大体80名。50名くらいは病院に勤め。病院としては、私がおります佐渡総合病院が一番大きくて、約500床。あとは150床、100床、30床くらいの病院に分かれております。

その中で医師の充足率を調べたことがありますけれど、各病院のご協力を得まして調べましたところ、厚生省規定の62%から65%までで、全くぎりぎりの状態でございます。という問題の中で、医師不足というのをどういうふうに解決していくか。同じ医師不足でも、例えば中心である私どもの病院には多少余裕がある部門がありますので、その医師が4か所ある地区病院の方に手助けすることができるかできないか。そういうことができるようになれば少しはいいかなあ、と思っております。それから医師不足以外に薬剤師さん、放射線技師、看護師も不足しております非常に各病院苦勞しております。

2番目は病院経営の困難性ということでございまして、国の現在の政策では僻地の病院あるいは田園部の小さな中小病院は赤字にならざるを得ないと。ど

んなに頑張っても変わらないということでもありますので、それをどういうふう  
に新市としてバックアップすることができるかということではないかと思  
います。佐渡の病院は国立、町立、市立が一つずつということで、いわゆる公立  
病院が3つございました。最近病院が移譲を受けまして、2つに減っています。  
あとは厚生連が2つ、それから民間病院が一つでございます。この病院を新市  
としてどのようにバックアップしていくか、ということも問題になるかと思  
っています。先程言われましたように国の政策に沿って予算に赤字が出ないよ  
うに効率的に再編成あるいは再調整を新市としてやっていく必要があるの  
ではないかなあ、そんなふうに思っています。

望月：はい、ありがとうございました。小田さんお願いします。

小田：はい。我々佐渡青年会議所は今年で発足して30年経つ訳ですけど、  
30年前の発足当時から、1島1市ということ唱えてまいりまして、先程川  
口市長が言われた通り、1島1市を目的とするものではなくて、1島1市によ  
って佐渡の活性化を図ろうということで、ずっと今までもシンポジウムなり勉  
強会なりを、住民の皆様対象にも行ってまいりました。詳しくは佐渡青年会議  
所のホームページ等をご覧になっていただきたいんですが。ここにきまして、  
任意協の発足以来やっとならぬ我々の唱えてきたことが現実として、佐渡の中  
で動き出してくれたかなあ、と思ひまして、先日も佐和田さんとかいろいろ紆  
余曲折がありましたけれど、今現在佐和田さんが復帰されまして、1島1市  
の中で動いているということで、今現在はほっとして、任意協が立ち上がった  
時点から我々は、1島1市後のことを考えましょうということで動いています。

今年には特に観光の入り込みの減少とかがありまして。観光も特にそうなん  
ですが、第1次産業の佐渡の中でも農業とか林業いろいろありますが、農業の方  
に目を向けまして、米づくりということで、有機米を我々メンバーでつくっ  
てみよう。佐渡でつくられた米に対して付加価値をつけることによって、佐  
渡全体のブランド力のアップとかそういうものに繋がられるんじゃないかとい  
うことで。ただ我々も町場の人間が多いものですから、農業に関わっているも  
のが少なく、実際農業に関わってみて、有機はどのようなものかとか、そう  
いうものをきちんと分かった上で周りにも発信していこうじゃないかとい  
うことで、今年もまた、有機米というものを金井町の人に協力していただ  
いてつくろうとしています。

今後の1島1市に対して期待することなんですけれど、協議会さんの方では  
今現在、一般知識人ということで10名入れていただいているんですが、でき  
れば幹事会レベルで素案を立ち上げる段階の中から一般の人を入れていただ

ければもっと効果的に、住民の意識を吸い上げるような意見づくりができるのではないかな、ということの一つ、期待しております。それから、合併協議会の中で話をする時に、先程松村町長さんの話の中にもあったんですけど、我田引水ではなくて、町益ではなくて、村益ではなくて、島益というものを、佐渡島の益というものを考えた上でのきちんとした議論で討論を行っていただきたいな、とその上で客観的に見たきちんとして整合性のある意見で、物事を進めていただきたいと、思っています。その中でどうしても結論を導き出せないものというのは、この先まだ1島1市になっての規模での動き出しはやってみていないのですから、動き出してみないと分からない部分というのも多々あると思いますんで、その辺は新市が動き出してからの中で煮詰めていってもいいんじゃないかと。そのための猶予の10年間でもあるんじゃないかとも思いますし。そういう慎重な議論というものを今後やっていっていただきたいな、とそのように思っています。

望月：はいありがとうございます。小田さんからかなり現実的な協議会の運営も含めて協議会への提案があったように思います。佐渡全島の島益をどういうふうにして大事にして議論の中心に据えることができるかという、提案だったかと思います。

佐々木さん一つお願いいたします。

佐々木：はい、女性の立場というお話だったんですけど、私は農業をやっております、合併の難しいところはよく分からないんです。ここにおいでの方皆さんも、家に帰ってお母さん方にまた説明していただければ、よく分かると思います。女性は難しい話にわりと立ち入らないような、ましてや農家のお母さん方はそういうところがありますので、こんなところにいるのは申し訳ないんです。

一応私たちアドバイザーは、町村ごとに各10人おりまして、今のところはそれぞれ独自に活動を細々とやっております。合併の難しいお話とかそういうのは、さておきまして、合併にこれからなるということに対しまして、佐渡の農業は女の人の力が大きいといつも言われておりますので、これから新しい島になるということで、私達は町村を超えて、今まで各町村で少しずつ活動しているのが、アドバイザーの皆さんで力を合わせて、新しい島になれば、新しいことが、活動ができるというのを、すごく感じていますし、そういうふうにしなきゃいけない、というか、佐渡をよくするためにお母さん方も、すごく一生懸命になりますので、いろいろと意見を聞いていただいて少しでも、活性化するために、また私たち女性も頑張りたいと思います。

難しい話から、きちんと理解できればそれが一番なんですけれど。いえ、女性の中でもしっかりと意見が言える人がいるんですけれど、たまたまひょんなことから私のようなものがこんなところに、来させていただいて本当に申し訳ないと思っています。いい島にしたいという気持はあります。本当に自分の地域のことだけを考えているようなことを男の方の話を聞いていると感じられます。なんか、もっと一步上の段階から全島を見渡して、本当にこうした方がいいというのを判断してくれるリーダーが、新市に是非あればいいというふうに思います。なんか変な感じで申し訳ありません。

望月：いいえ。分かりました。新しい行政づくりの中での一つの基準は、やはりごくごく普通の女性がどういうふうに活躍の舞台を広げることができるか、こうした行政をどういうふうにつくることができるか、これが一つの尺度になってくるように思います。それだけの変化が佐渡だけではなくて新潟県全体でも起きているようにも思います。

塚本さん、これまでの合併協議会の取り組みについて、塚本さんなりのどういうふうの感想を持っておられるか、それからそのことについての塚本さんなりの要望がありましたら、出していただけますか。

塚本：はい。私たち「新市の未来を考える会」というのは、首長さん、議長さんたちが任意協を立ち上げたころとほぼ同じ時期から私たち住民レベルで、知りたいことを少し勉強をしようやということで、始めた会ではあります。対馬の話をお聞きしまして、対馬と佐渡の場合はまず間違いなく1年間は期間が違うんですね。対馬が始めたころと、対馬市が成立するまでの期間と佐渡の合併の期間は約1年間は間違いなく足りない。ですから非常に慌しい合併に向かわんとしていること。ところが対馬は6町であるのに対して、佐渡は10市町村があって、なお急いで向かっているということ。ここに非常に危うい部分を僕らは持ったりするんですが。

一方で対馬の方は早い時期から住民に対して、アンケートや住民説明会、更には住民参加のいろいろな取り組みを随分と取り上げておりまして、これが今回佐渡の場合はなかなか法定協議会にここにやっと10名の学識経験者の参加が認められたという程度でして。ビジョン検討委員会のところも対馬市の経過を見ると、ビジョンを検討するだけでも1年くらい、期間をもらっているんですね。それに対してビジョン検討委員会でやっておられた服部さんたちなんか、1年くれたらもう少しじっくりやれたかもしれないというくらいに、慌しかったと思うんですが。そこらへんが経過として住民の皆さんから見ると、今ほど佐々木さんが言われたように、なんか、よく分からんうちにとんとん拍子

にいているのではないかなあ、と受けているんじゃないかなあ、というふうに思います。

住民参加が顕著になっている話題がございまして、先程松村さんの方にお聞きしましたところ、対馬では旧町村名はどうなっていますかと聞いたら、実はこの件で合併協議会、持ち越しているようです。対馬では対馬市厳原町と、そっくり町名の町まで残って普通に字名が付くと。6町全部そうだそうです。これだと住民感情的に異論は出ないのではないかと、随分苦慮と配慮がなされているなあ、というふうに、その時も思いました。せめても、僕らが提案していたのは、自分の町名というか集落の名前ぐらいは、佐渡市、私は湊に住んでいますので、両津湊、というふうに両津を付けるかあるいは、例えば、今両津が付いていますけれど、昭和の大合併の時に海府だとか前浜とかというような旧村名が消えているんですね。これを逆に今回は両津ではなくて前浜を残したいとか、というようなことを前浜地区で両津にするのか前浜にするのか、そこら辺を住民で選ばせたらどうか、というような提案を早いうちにしまして、これが圧倒的多数であることがアンケートで分かっているんですね。こういうことも実は住民参加が遅れたためにここへ来て期限がない、強行突破だと。なんかそんな気がしてしょうがないんですね。

他に庁舎問題なんかもさすが対馬は見事だなあ、と。実は新市の庁舎は合併前に絶対に決めなければいけない基本項目でも、法定項目でもないんですね。しかし確かにそのことはもめるだろうということは予測はできますが。新庁舎の問題は新市の人たちに委ねましょうというふうに書いてあるんですね。やはり苦慮した結果そういく。ちょっと佐渡は新市に事務所の、という表現と新庁舎が基本項目だと勘違いをした経緯もありまして。あれで脱退騒ぎなんていうのはちょっとお粗末過ぎたな、というふうに我々からみると思ったりもします。

その他ケーブルテレビで電話が無料になるような新しい試みがあると、これだけでも合併してよかったなあ、と普通の島民からすると思ったりもします。なんか、目玉もないままいくことに対していくつか危惧はしています。新市になったら我々のプランは「エコアイランド佐渡」というプランをすでに持っています関係で、新市になっての提言はその時にまたしていきたいと思っています。

望月：はい分かりました。ありがとうございます。これまでの経過がいろいろあったにしても、いずれにしても10か市町村が佐渡市としてまとまる方向性を打ち出すことができたというのは、もう少し時代をさかのぼって考えますと、これはかなり画期的なことのようには私には思えます。どんな大きな政治家でも佐渡を一つにまとめようと、そこに手をつけたとたんに自分の政治生命が

絶たれるかも分からない、そういう恐怖感になるような問題がこの佐渡にはあったように思えます。これをしかしどんな事情があったにせよ、10か市町村の行政が、時間がかかるにせよ前へ踏み出して、佐渡の一体化となつての活性化を図ろうという、そういう旗印を掲げて前に歩き始めているということは、かなり大きな変化がこの佐渡にも起こるとする予感を住民の間に生む、そういうふうには思います。

その上で法定協の中で、先程の齋藤事務局長の報告ですと、一応合併協定書の中に盛り込まなければならない40項目等々の中にすでに28項目について、合意ができています。その意味では、事務的な作業としては非常に進捗している協議会ということが言えるかも知れません。その一方で住民との間の合併に対する浸透というか、住民の中のこれを支える動きへの参画というか、そういうものがやはり他の地域に比べて、これから一つの課題になっているように私には見えます。残された時間の中で新しい市をつくるための骨格的な協議がこれからの課題になっていくんだろうと思います。その中でも、佐渡市としての行政組織をどういうふうにして一体化してつくっていくのか、先程対馬の6町の経験として、市町制の各旧町を市長に関し、市長の権限を大幅に強化し、更に市長を特別職として当分の間設定して移行を図る。非常に面白い提案があったように思いますが、川口市長に伺いたいです。協議会の議論は議論といたしまして、川口さんとしては、これから佐渡市の行政組織をつくる上で、どういう点を大事にしようとしているのか、何が確信の問題であるのか、その辺を少し出していただけますか。

川口：はい。その前に先程塚本さんの方から庁舎位置決定については早かったんじゃないかというご指摘もあつた訳でございますが、これは、議論は十分した訳でございますが、ただ私は目標というものをきちんと定めて、それにいかに早く対応して島づくりをやるか、ということが大事ではないかと思つています。合併をしてから全てを決めるということについては、町長さんには申し訳ないんですが、やはり一つのビジョンを持って前へ進むということになるかどうかと思つています。

今ほどコーディネーターから組織機構等についてはどういうことかということでございますが、事務局では本所と支所の関係で、現在のサービスは低下をさせないように、こういうことである訳でございますが、そういたしますと、私はこの市町村合併は本当にコスト等を考えた中でいい方法であるかどうか私はちょっと迷う訳でございますが、私はやはり本所というものをきちっとすべきだと。そして各支所というのは実情に基づいた基本的な窓口サービス、本当に住民に理解をしていただくような、そういう組織であればいいというふう

に考えております。やはり合併すれば10か市町村ある訳でございますが、私の考えを申し上げれば、中央に本所があって、後は南部とか相川とか両津、そういうところの支所を強化する。ひいては将来はITの時代が来る訳でございますので、私たちが今求めている以上に若者はそこを先取りしている訳ですから、そのITをいかに活用した自治体のあり方というものを模索するのが、今ではないかな、とこう思っております。やはり今は現状のままであっても少なくとも5年後にはそういう形で行政のスリム化を図りながら、やはりコスト削減をするという、こういうことが必要だと思えます。政策的には、やはりそうはいっても過疎化を食い止めなければならないし、合併することで過疎が光を落としていくことであってはならない訳でございます。そういう点では政策的に過疎のどういう拠点づくりをしていくか。そういう施設づくりをするか。そのことが大事ではないか。ということでございまして、やはりきちっとした10年間の目標というものを決めて、その実現に向かって努力をし、住民サービスの向上に動くということが大変ではないかな、と考えています。

望月：はい、ありがとうございます。合併の大きな行政目標の一つに、行政のスリム化、ということがどうしてもある訳で、その根底には限られた財源の中でどういうふうに民生の安定、福祉の向上を図るか、そのための財政のスリム化という基本命題があるという川口さんのお考え。その点で、分庁ではなくて本所と支所、その支所のサービスは基本的には窓口行政サービス、本庁の強化によって、というお考えだったように思います。これは各地の新市計画の中で大きな議論になっているところです。支所の権限を大幅に強化することによって、合併が大きな行政化になって過疎地が更にいっそうの過疎が促進されるような形態を防ぐために、支所の権限を大幅に強化する。先程対馬の松村さんの提案みたいな形で検討している地域もあります。これはかなりこれからの合併協議会の中でも大きな議論になって、どういうふうな道を選ぶか、非常に注目している問題だと思います。ただいずれの道を選ぶにせよ、先程川口さんの提案があったように、過疎に対する、あるいは老人が増え、高齢化率が上がっていく、これに対する手立てをどういうふうにもう一步考えておくか、そこセットで考えなければいけない問題だというふうに提案されたように思います。

さて先程服部先生の方から、新しい市をつくる以上、佐渡の医療水準も向上する、その医療水準の向上に繋がるような新市計画を希望したいという提案があったように思いますが、医師不足の問題は、佐渡だけでなく新潟県の場合、一部の新潟市を除けばほとんど全域的に起きている問題な訳ですが、充足率60数%の厳しい状況の中でもどういうふうにして佐渡市が現在よりも医療水

準を向上することができるのか。服部さんのお考えを出していただけますか。

服部：はい。そのことに触れる前に先程対馬の状況をお聞きして、非常にいいなあ、と思ったのは、病院がみんな自治体系で統一されていますので、私どものような3組織が入り乱れているところより簡単に済むのではないかと非常に羨ましいなと。それから従いまして医療へのバックアップにしても、市として全面的に責任をもってやれるというところが羨ましいなあ、と思いました。

さて、佐渡のことをございますけれども、佐渡の医師の半分くらいは新潟大学から出張してもらっている訳であります。それから新潟大学の医局を経てよその大学からも来ておられる訳であります。医師を増やすことを新潟大学にお願いしてもそんなに増える訳ではございません。今までも各病院の院長が必死になってやってきた訳ですね。そこでどうするか、であります、やはり、佐渡島内の病院を急性疫と救急をやる中心病院と、各地域の慢性疫の医療、一般医療を確保する地域医療とに分け、中心病院には医師がたくさん集まって、いざという時にはレベルの高い診療に応じられると、そういう仕組みをまずつくる必要があるのではないかと。そういう中心病院には設備もきちんとされれば、若い医師にとって魅力ある病院にすることができる。病院機能評価にチャレンジするとか、研修指定病院を受ける、というようなことによって、長い目で医師の充足を図ることができるのではないかと。とそんなふうに考えております。勿論医療技術者の不足に関しても、島内の高校への勧誘、PRをきちんとやっていきたい、そういうふうに思っております。

それから現存の医師の有効活用。先程も申しました。余裕ある病院から専門医師を派遣するというところであります、これは病院組織を越えた活用ということになるのですが、これが今まで実際うまくいっていなかったというのが問題だった訳でございます。この際、どういうふうにしたら実現をするか、ぜひとも検討する必要があるかと思っております。そういうことを佐渡全体としてコントロールするために、やはり組織を越えた新市としての医療福祉センター、というような組織をきちんとつくって、ある程度力を持って、ネットワークとして統合的に動かす必要があるかと思っております。

現在今まであった市立病院、町立病院は、このほど新市においても市立病院にすると法定協議会で方針が決まりましたけれど、この2つだけが市立病院ではないということを考える必要があるかと思っております。患者の動向を調べてみますと、2つの市立病院が全体の比率をどのくらい稼いでいるかといいますと、救急搬送に関しては12%、入院患者さんに関しては12%、外来患者さんに関しては19%、残りは厚生連、それから民間病院でございます。そういうこ



とを考えると、今までの例えば両津市における両津市民病院とは違った市民病院の感覚が出てくると思います。また出てこないといけないと思います。島全体の医療に責任をもつという立場を強く出していただいて、きちんとした医療機関の整備、統合調整に関しても新市として対応していただくことが大事ではないかと。そういうことがうまくできれば、かなり改善に乗ると思いますし、私どもも一生懸命に努力をしていきたいと、こんなふうに考えておるところでございます。

望月：はい、ありがとうございます。新しい市をつくっていく上で、産業振興というのはかなり基幹の問題になる訳ですけど、とりわけ小田さんも自分で会社をもって経営されているようでありますが、佐渡に本社があって、従業員も佐渡の者でという企業がどのくらい増えていくか、つくることができるか。そういう企業家の視点がこれから大事な方向になるでしょうけれど、産業振興について小田さんはどういうことを新市に注文したいとお考えですか。

小田：はい。今の時代はやはり企業を新たに起こすといっても、時代的にかなり厳しいものがあるなあ、とは思います。ただ新規産業の引き起こしというものを全体として考えていただかないと、佐渡の経済としてはやはり苦しいものがあるのではないかと思いますし、我々としてはもう一つ、新しいものがダメなら今あるものの見方を変えてみたりとか、方式を変えてみたりとか、構造のあり方を新しくして見て、改革によって新しいものに変えていくことの模索も必要かなあ、とも思います。

特に先程川口市長も言われましたけれども、IT関係。これは場所が離れていても発展しうる産業ではないかと、思います。これはきちんとした記憶はないんですけど、今のインターネットの絶対数にしても日本は米国について世界第2位だと思います。普及率では4位くらいですかね。ITの活用とかにつきましては日本の民間企業と個人的なものに関しては世界で確か去年一昨年は7位か8位くらいだったと思うんですけど、日本の行政とか政府というのが、世界の中でも38、9位とか40位前後で行政のほうがITに関しては日本全体の足を引っ張っているような状態になっている。民間と行政を合わせて日本の評価というのが大体20位前後らしいですよ。いかに日本が、世界で20位というのが進んでいるのかどうなのかはちょっと分からないですけど、日本の中でもIT関連、特に行政関係の努力が足りない部分ではないかなあ、というふうに思います。行政が自分でそういうものを成し得ないのであれば、そういう環境をつくってあげて民間企業等に、そういう部分を移譲なりして、新しい産業の一つにするという形で。私はその資料を見た時にはるかに民

間の方が進んでいる技術力と活用方法をもっていると思いました。そういう部分に行政はきちんと目を向けて、引き起こしをやっていただきたいな、と思います。

望月：はい、ありがとうございました。佐々木さんは、佐渡において誰もが考えていることの一つに農業充実。農林漁業が佐渡を支える一つの大きな柱になっていく訳ですけど、その中で特産物をつくって、佐渡のブランドでどういうふうに関外に向かって発信できるか、佐々木さんは何か自分でも豆腐づくりをやっているんですけど、その経験から、一つこれからの農林漁業を新市の中でどういうふうに柱とすべきか、提言をしていただけませんか。

佐々木：はい。私たち勉強会の中ではグリーンツーリズムという、来てもらって農村を体験してもらおうような、観光方法もいろいろお話を聞かせてもらっています。全て、情報を提供すれば、佐渡はこういうところなんだと、体験的な観光とか、そういうふうなものも話に聞いているだけで、じゃあ、私がやります、ということはないかなと思います。けれど、これから若い人には島外からお嫁に来ている人もたくさんおりますので、観光を兼ねた農業とかそういう方面にも、目を向けていくべきだと思います。

豆腐は私たち今のところは小木町の中だけしか消費できないようなほんの微々たるもんなんですけれど、それもまた少しずつやり方を変えれば、地域を全部巻き込んでいく活動にできればいいな、という話は仲間の中ではあるんです。やはり、新市になることで不安がいっぱいあります。女の人は順応性がありますから、新市になって、こういうふうになるんだよ、ということになれば、そうなんだと、いい方へ変えていけるんじゃないかと思うんです。そういう話の流れの中で私たちなりにまた頑張っってやっていきたいと思いますのでよろしく願いいたします。

望月：はいありがとうございました。塚本さんには環境をテーマにお話しをしていただきたいと思う訳ですけど、別に環境だけに限る訳ではないですが。これからの佐渡を考える上で朱鷺の問題もある訳ですけど、環境というのは佐渡に限らず、これからの21世紀の地球が生き残れるかどうか、そういう考えの上での大きなフレイズになってきていると思うんですが、その中で佐渡が新しい環境問題についての問題提示ができるかどうか。そのための実現ができるかどうか。外から大きく注目されているように思うんですけど、塚本さんは環境問題という切り口から新市に対してどういう提言をされるんでしょう。

塚本：もう、新市の未来を考える会の母体が佐渡千人委員会といますが、この千人委員会の2本柱は、環境と教育に佐渡の未来を託そうと。託すとか、基本だとか重点だというのは、新市になった時に行政もこれも大事です、と新市ビジョンの方も出たりしているのですが、あれも大事これも大事と、全て同時並列で盛り込んで、じゃあ結局この市はどちらに向かうんだろうといった時に、優先順位をつけなければならないと思うのですが。例えば福祉の島にするんだと、介護のいる年寄りになっても母子家庭になっても福祉が充実した島にするのである場合は、そこに全国の、他の市町村のどこよりも、優遇されたポイントぶっ込んだ物でないと、わざわざ全国から佐渡へ移住をしようという人を引っ張る力にならないんですね。ということは他のところを減額してでもそこにいくんだと。というようなところがあるのかどうなのかというところが非常に懸念されますが、私たちが一番思うのは、佐渡は朱鷺がせっかくいてくれるのだから、エコロジーの島、エコアイランドにしてしまうことが結果的には一番エコノミーの島になりはしないかと。

佐々木さんたちがいわゆる農業をやっていて、佐渡の米というのは、値段は魚沼産に次いでいますが、そんなにポンポンと引っ張りだこになっている訳ではないですよ。ところが一方で有機産米となると、途端に引っ張りだこの現状があるんですね。佐渡では朱鷺を飛ばそうという一方で、空中散布を今でも盛大にやっている島でございまして、ここら辺の整合性がきちんとして、佐渡は環境の島ですよ、というふうになった時には勿論観光に与えるイメージも、あるいは当然一切の化学肥料や農業化学飼料や農薬を使わないということになった場合に、それが海に与える影響も相当に大きいんですね。漁業の方も振興に繋がってくると十分に考えられると。観光、漁業に与える影響も含めると、有機農業を支援するために、有機農業を全島に向けたら大変な金と労力が要るよと。そこにぶっこんだら、ほかに影響するから、すまんけれど、他の道路整備や図書館、美術館、待ってくれと。というふうな強弱をつけて、出しても十分佐渡に、いわゆるエコを勧めることで新しい産業が起きる可能性がいっぱいあると。産業の面からも是非エコアイランドを推進してもらいたと思いますね。

望月：はい。今の塚本さんのお話しはこれから法定協議会が最終的に固めてくる新市計画というのが、時として行政は総花的にいろんな柱を立ててきますけれど、その優先順位をつけるのになかなか、得手でない組織であるように思います。しかし先程対馬の松村さんのお話にもありましたように、これから地域が生きていく、伸びていく場合、その地域の個性の競い合いによって、地域の優劣が決まってくる、そういう環境の中に入った時に、佐渡が最も力になるの

は何なのか、そうしたグレードの中でこうした個性化を絞っていく。このことによって今回全面的にそれが収斂していくような革新的な問題の一つが環境だという塚本さんの提示だったように思います。

教育という問題を申し上げましたけれど、佐渡の教育というのは新潟県全体の中でも、明治以降佐渡は教育の島と。それで人材を輩出していったような島の歴史があります。観光もそうです。かなり大きな問題がありますけれど、それをどういうふうに整理していくか。一つの体系として三角錐の中にまとめることができるか。それがこれからの新市計画の中における一番の議論の中心だ、という提示だったように思います。松村さん、今までのお話を聞いて松村さんなりのコメントをお願いできますか。

松村：NHKのドラマで「そのとき歴史は動いた」がありますが、今日は佐渡の歴史、離島の島の歴史がつくられる時なのかな、という感慨をもっております。川口市長の方から話がありましたように、物事には一騎果敢に目的に行く場合と、寄り道をしていく、必要な無駄というのもあろうかと思うんですね。私どもの対馬というのはまさに必要な無駄でございまして、これがいつまでも続くはずはないんです。支所機能の充実というのはあくまでも川口市長がおっしゃったように、支所は窓口業務で、市民の人がやっぱり不便をきたさないような、そういうところに集約をされると思うんです。最終的には本庁舎というのはそういうふうになっていくと思いますけれど。私どもは左様に、ここ以上に難しかったということです。でこういったことなんですが、お話しのようにITブロードバンドの時代ですが、島だからこそ、情報を。過疎になったらいかんですね。島だからこそ情報が大事なんですね。私どもは、まちづくりは人づくり、人づくりは自分づくり、自分づくりは交流からという方程式で行ったんですが、やはり、かつてのうちの教育長が、僕が人をつくるから町長、教育は任しておいて下さい。神ならぬ人が人をつくるはずがないじゃないですか。だから私どもは自分づくりの輪を広げていく、それが人づくりに繋がる。人づくりはどうするんだ、自分づくりは。これは交流からなんですよ。佐渡の人と奄美大島の人が出会ったとします。生活も風習も習慣も歴史も違いますね。そうするとここに衝撃が走ります。もっと大きなインパクトを与えるのが国際交流だと思うんですよ。韓国の人と私どもが付き合います。私どもはお椀に盛って食べる場合、お椀を持ち上げて食べますね。これは行儀がいい。これを置いて食べると姿勢が悪くて行儀が悪いと。韓国は逆ですね。そのまま置いて食べるのがいい。スプーンの文化は確かにスプーンでこうやるんだから、なるほどこういった常識があってもいいんだなあ、と。ここに衝撃が走ります。私は子どもの頃からじいさんばあさん、おじいさん、おばあちゃんから、そんなこと

しちゃダメだよ。行儀悪いことをしちゃ、と怒られていました。そうか箸の文化とスプーンの文化の違いだな、と。自分自身が自分自身に真摯に対峙できるようになります。これが自分づくりの始まり。原点、きっかけになりますからね。そういうことで私どもそういう方程式でやってきたんですが、先程のお話しにもあったように、やっぱり私は1次産業と観光の融合する島づくりってことだろうと思うんです。

よく全国都道府県が地産地消というのを提唱しています。自分のところでつくったものを自分のところで消費しましょうと。そんなことをしていたら原始生活になるではないですか。佐渡の地域でつくったものを佐渡の人だけで、消費してしまいたら、これは所得吸収力がないんですから、地産地消というのは交流人口を10倍も20倍も増やして、初めて地産地消が生きてくる訳ですね。先程のお話しのように、産業振興というのは、特に島の場合は島でしかないもので勝負していく。そしてそこで交流する。観光と農業と漁業が同居。複合観光農業であれ、複合観光漁業であれ、複合観光林業であるかも分かりません。例えば、真珠のオーナー制度、しいたけのオーナー制度、いろんなことがたくさんありますね。そういった形でいかに交流人口を拡大していくか、ということになるかと思うんですがね。

確かに中国で7千円のところでやっているんですから、製造業は何をしてもだめですよ。そうしたら国が明確に産業構造を出せばいい。出し切らないから株が下がっていくんです。中国へどうぞ大企業と行って、向こうでやったらどうですかと。向こうで出稼ぎをやられて、こちらは交流産業でやりますから、そしたら、ホスピタリティもてなしの心も出てきますから。私どもの対馬も佐渡も一緒だと思います。豊かなところはそうですよ。水産漁業が元気なところは、「またよそからこの下郎どもがやって来て、ゴミに山を散らかしにやって来て、ほんに来なきゃあいいのに」と言われたら、来たい人はいないですね。やはり、もてなしの心で、「ああよく来てくださいました」と。これだとまた来たくくなりますよね。そういう違いがございます。やはり私はそういった点では1次産業と観光、交流産業の中に複合産業としてやっていくと、これだろうと思っています。

望月：どういうふうに交流人口を増やしていくか。これが1次産業をどういうふうに組み立て直していくかに繋がってくるお話しだったと思います。

さて与えられた時間も迫ってきておりますが、5人のパネリストに最後にこれからの法定協、1年後の合併というスケジュールが設定されておりますが、それを一つ目標において、発言をお願いしたいと思いますが。今度は塚本さんからお願いできでしょうか。

塚本：はい。もう佐渡市が立ち上がるんだという前提で考えるならば、今回の合併にいささか急ぎ足であったということを考えればですね、新市に今回地域審議会というのを置くことになりました。これも私たちがせっせと置き置きとやってきたのが効いてきたのかどうか分かりませんが、地域審議会が、国が旧市町村の議会の代わりみたいな感じで当面置けばいいさ、という程度に、申し訳程度に用意したつもりの制度かも分かりませんが、これをよりバージョンアップしましてですね、新市においてはこの地域審議会が機能する、住民の声を行政の方に吸い上げる仕組みが是非とも強化されることだけを強く、新市に期待したいと思っております。

望月：次いで佐々木さんどうぞ。

佐々木：はい。一言だけ。新しい島になるということで女性も立派な意見をもってちゃんと行動できる人がたくさんおりますので、半分は女性ですので、是非女性の意見も入れて協議していただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

望月：はい。ありがとうございます。小田さんどうぞ。

小田：先程の対馬の例でもあったんですけど、支所機能を充実させて権限を大幅に移譲させるということになると、あくまでも合併であって、広域連携ではないと思うんで。合併であって、合併の良さをきちんと生かした構造というものを皆で話し合って、きちんとしたものにしてもらいたいなあ、とそういうふうに思います。佐渡においては一番特色の出しやすい産業としまして、やはり1次産業の見直しというのもきちんと図っていきたく思いますし、IT化という部分でも新しい産業の構築というものを図っていただきたいなあ、と。やはり過疎は佐渡にとってはかなり大きな問題でもありますし、佐渡全体の対策というものを、今までやれなかったものをきちんとやってもらいたいと思っています。

望月：服部さん。合併協議会の副会長としてこれからどういうふうに参加していくか、決意も含めてお話しいただけますでしょうか。

服部：はい。医療に関しましては道路やトンネルなどのインフラ整備、それから救急体制の構築、それから診療所の先生方との連携で、全島的にもお互い仲

良く効率を上げているという、モデル地区になるようにお互いに努力したい。新市誕生というのが千載一遇のチャンスではないかと、そのように努力したいと思います。それから1島1市の全般的なことに关しましては、私はどこかに書きましたけれど、複数の中心のある豊かな広がりのある社会がいいんじゃないかと。そういうふうに思っております。つまりですね、佐渡のいいところの一つは各地域が地域性を遵守して、よく言えば遵守、悪く言えば地域エゴの反面もあろうかと思っております。いろいろな郷土芸能、産物が面々として残ってきていると。言葉遣いも違いますね。1島1市になったからにはそれを特長として、伸ばしていく必要があるのではないかと、多数の中心のある広がりのある佐渡、ということで頑張りたくと。

望月：はい、ありがとうございます。最後になりましたが、合併協議会の中でも10人の首長はこれからの重責を担う訳ですが、その代表といたしまして、川口さんのお考えをお願いいたします。

川口：私どもが描いております新市建設計画の中では、やはり佐渡が掲げる諸問題、過疎化、少子高齢化、そしてまた産業の停滞等にどう対処していくか、という施策を講じている訳ですが、それを実現していくために私の考えを述べたいと思う訳です。先程来から申し上げておりますように、佐渡は10の垣根が存在する訳でございます、従って、隣の市や町や村の施設に直接参画することができなかつた訳でございます。その意味では全体の行政で、佐渡がどのような道を進んでいるかを考える上では分かりづらい側面があつたのではないかと、思っております。

例えば、観光面におきましては、観光客というのは佐渡観光として、島に訪れる訳でございますが、入ってみますと各市町村の対応と申しますか、受け入れがそれぞれ違う訳でございます。そういう点は反省することではなかつたかと思っております。それと合わせて、合併を転機に意識改革というものを全島的な視野から考える必要があると、こういうふうに思っております。また、佐渡島の再生という大きな目標を達成するためには、これまでのような行政主導型の対応では問題がある訳でございます、この辺は官民一体となつて取り組むことが必要不可欠である訳でございます。また佐渡には自然歴史、文化、そしてまた食文化というのもほかとは違つている訳でございます。そういう佐渡にはご案内の通り、自然と申しますか、宝を存分に生かしていくこと、そういう再点検が必要である訳でございますし、その施策をこれから進めることが重要な要素ではないかと、思っております。ご承知のように全国からみても非常に知名度が高い佐渡ブランドというものを持っている訳でございます。ここから情

報を発信していくこと、このことがまた離島振興法とのからみもある訳でございます。そう意味で観光産業と1次産業をドッキングさせたような、そういう振興策も必要であると、そういうふうに思っております。これができる島であると私は確信をしております。

私はじめ島内市町村ともども、これからは自分が佐渡市の市長になるんだという責任と気概を持って、合併に残された時間の中で、島民が本当に喜んでいただけるような住みよいまちづくりを、これからつくり上げ、停滞している佐渡というものを21世紀に向かって、皆で力を合わせてつくり上げていきたいという思いがいっぱいあります。おそらく市町村長方、議長の皆さんも同じ考え方ではなかろうかと、こういうふうに思っております。今後ともこの市町村合併については皆さんの力なくして実現できない訳でございますので、今後ともご協力を賜りたい、とこう思っている訳でございます。

望月：はい、ありがとうございます。パネルトークこれで一応区切りをつけたいと思います。今まで松村町長を加えましてのいろいろな意見が出ましたけれども、佐渡の10カ町村が一つになるということは、言ってみれば昔の佐渡に戻るといふことなんですけれど、明治以来、加茂郡、羽茂郡、雑太郡この3郡からスタートした佐渡の近代化の流れが10カ市町村という現在行政体の形成で70数年の時間を経過している訳なんですけれど、もう1度今の時代の、流れの中で一つの島に、一つの行政体に再構築して島の活性化を図っていく、そのためにハードと並んで住民、議会、行政体の意識改革がどうしても根底に据えられなければならない、そういうふうな提示があったように思います。

それで今日のパネルトークを聞いて、会場からの質疑の時間をつくれということですので、これから会場からの活発な意見を求めたいと思います。質問のある方、挙手をしてお願いできでしょうか。どうぞ。

来場者：一つ質問。松村町長さんをお願いしたいんですけど、ケーブルテレビの話がございましたけれど、その場合の受益者負担がどのくらいかお分かりになりましたら教えていただきたいと思います。以上です。

松村：今私どもが美津島町でやっているのは月に500円です。難視聴解消で皆さんがやってあった共同アンテナの維持費と同じでございます。以上です。

望月：よろしいですか。

来場者：はい。もう一つすみません。導入時に受益者はどのくらい負担してい



ただきましたでしょうか。

松村：導入時の負担はございません。

来場者：ありがとうございました。

望月：あとございませんか。はいどうぞ。

近藤：合併協の代表の川口両津市長にお尋ねします。私も両津の近藤といいます。先程川口さんの方から新市建設計画の話がありました。私たちが合併について賛否を決めるもとは、新しい市が自分たちの地域が、どういう姿になるのかと、それによつての賛否を市民は考える訳ですけど、市民は今まで、口では新市合併、新市建設計画ができたなら、と言っておきながら、いまだ市民の前に明らかになっておらない。そして6月に廃置分合。ほとんどそれで決まる訳です。そういう今日であつて、まだ我々は自分の地域がどうなるのか理解されないままに、どんどんどんどん1島1市が進められて、しかも今日のお膳立ての形は、すでにその前提の形ではないでしょうか。本来ならば、もっと市民との交流、意見のやり取りの時間も持っていていいと思う。で、まだできていない。これから私がそういう質問をしますと、急いで、そのうちいつできます、という答えが来ると思うんです。本当は新市建設計画というのは、もっと各市町村と、各市町村は地域の住民と、フィードバックをして、それを繰り返しながら、積み上げていく。それが本当の市民に密着した計画ではないでしょうか。それがなくて、後ほんのわずかになってできたって、それは、私たちはろくなもんじゃないと思います。そういう思いをまだまだ多くの市民が持っています。もうすでに協議会の方では、市民の多くが賛成したんだ、これで1島1市ができるんだと、というようなものの考え方、言い方が随分耳に入りますけれど。私は合併を賛成とか反対とか言うのではない。私は国の言い分も分かる。金がないから市町村を3分の1に減らせと。佐渡は10あるから3つでいいんだとか。いろいろな方法がある訳です。当初から1島1市にこだわってきておる。それでは1島1市になったら、佐渡はどう良くなるんだ。何が良くなるんだと。

それから自分たちの地域がどういう形になって、我々に帰ってくるのかと、そのことが全然分からない。おそらくこれからやったって、間に合わないでしょう。形としてはできますね。佐和田さんが入った、抜けたというのは、理屈もいろいろあるでしょうけれど。でもそんなことで、皆がこれは良かった、参加しよう、いい島をつくろうという気持ちになれるとお思いでしょうか。質問の1点はこれからどう新市建設計画をつくって、どういうスケジュールでつくっ

て、みんなの前にどのような形で提示するのか、そのお考えをお尋ねします。

望月：はい、分かりました。新市計画の作成状況および、いつ頃住民に向かって説明ができるかの質問だったように思いますが、よろしいですか。川口さんよろしいですか。

川口：はい。住民投票うんぬん、につきましては後ほどお話しを申し上げますが、その前に私どもこの合併につきましては県の考え方というものが先に出てきた訳でございます。このことについての住民説明というのは事務段階で、市内でやらせていただきました。そしてまた私どもは島の各行政よりも早く実は合併についての窓口をつくらせていただきました。その中での情報、そしてまた、この合併ということについては、シンポジウムを開いたり、アンケート調査をしたり、そういう中で今までまいったところでございます。私は住民投票についてはいつも申し上げているように、投票そのものを否定しているのではないことをはっきり申し上げているところでございます。昨年8月でしたか、20か所にわたって、合併の説明会をさせていただいた。この中でもこの住民投票については、両津市が一つの玄関口としてのまちづくりをどう提言をするか、すでに提言をいくつか、している訳でございます。そういうものがこの両津市の発展、それからまちづくりに阻害するといふのであれば、これは住民投票もあり得るといふ発言もしてきたところでございます。従って今、将来の佐渡を決める、まちづくりをする、新市の建設計画、そして、それに伴う財政計画、こういうものを今煮詰めているわけでございます。県との裏づけも取っている訳でございます。こういう計画では私としては十分私どもの意向といふものは配慮をしていただく計画になると確信している訳でございます。そういう段階では今やる、やらん、こういうことは、私は現在考えておりません。そういうことで住民投票についてのご理解を賜りたいと思います。

望月：時間も過ぎたんですけれど、最後にお一人だけ質問ございますか。

山本：金井の山本と申します。非常識のようですが、あえてお願いでございます。全島規模でこういう集会を持ちまして、一般島民から意見を聴取するという機会は、非常に少のうございます。というよりはむしろ、今までは皆無でございました。従って、この際一人でも二人でも、意見を聴取するように多少の時間延長ができないかどうか、それをお願いしておきます。それともう一つ要望でございますが、今日は合併協の会長もみえておりますし、首長ほとんどがおいでのようでございますので、あえて申し上げておきます。任意協を立ち上

げ早期の時点でも、一度ございましたし、ついこの間は、真野会場での協議会におきましては、傍聴者1時間半締め出しを食ってしまいました。これは時間の説明も予告も何もありませんでした。傍聴案内の文書にもそういう説明はございませんし、私どもは傍聴規程に基づいて、傍聴をしております。当日は1時間以上をかけて傍聴に参集した島民もたくさんおりました。ですから1時間半待ちきれなくて途中で帰った傍聴者もおります。どういう会議の内容であったのかは分かりませんが、私どもが傍聴規程に基づいて傍聴をする訳でございますから、何ら支障はないと思いますが、今後こういうことのないように是非お願いしとうございます。会長、よろしく願いいたします。以上です。

望月：今の方の、質問の論点は任意協議会の話ですか。

山本：1回目は任意協議会、今回は法定協。これはどう鼻屑目に見ても開かれた会議とは言いがたいと思います。住民参加とか開かれた行政といいながら、実際に佐渡は閉ざされた行政になってしまっております。このところはよく今後も合併協の皆さん方も心していただきたいと思っております。以上です。

望月：はい、分かりました。先程の両津の近藤さん、金井町の方、合併協議会の運営の仕方にもいろいろ意見があるんでしょうけれど、それは別にして、かつて各地でいろんな形での協議会のもち方がありました。基本は行政の情報開示と説明責任を前提にして各地の協議会が行なわれております。その意味ではかなり大きな改善がなされているように私は理解しております。それなりにまだ不満はありまじょうし、佐渡が各地の合併協議会に比べてかなり情報開示という点で進んでいるかということはあるが言えませんが、それなりの努力はなされているふうに私は理解しております。そしてこの種のシンポジウムを何のために開くのか。勿論、今の金井の方がおっしゃるように住民との間の意見交換の場として開くのが最もいいのかもしれませんが、ただ、そうは言っても限られた時間の中で、それぞれ代表の方の意見の中にいろんなものを反映させて、全体の来場者に合併に向かっている方向の理解を深めてもらう、これが一つの狙いでありまじょうし、それはそれなりに意義のあることだと思っております。

合併問題というのは特に佐渡のように長い歴史の中で、それぞれ10の市町村が蜂の巣みたいに細かく分割して、それが今の流れの中で、この行政の形ではどうしても佐渡の復活が図れない、復興が図れない、その一つの苦渋の選択として、今の流れがあるんだろうと私は理解をしております。そこに向けて各10の市町村長、議長、議会含めて、それこそ苦渋の選択の中で今日を築いて

おります。その中に住民それぞれの意見の反映なり、反省、反対を含めてのそうした流れの中できているんだということ、これが後世において必ずや実を結ぶんだという、確信のもとでそれぞれの首長さんが、進められているんだらうというふうに私は理解しております。ただこの問題について、かなり強い賛成なり、あるいは危惧の念があるということもやはり含まれておかなければいけない。それがこれからの行政の新市づくりの中で、一つの緊張感を持ってことを進めることになるんだらうと私は理解しております。

松村さんの言葉を借りるのではないんですけど、行政というのは一つの緊張感を持ってことを進めることがいい仕事をする最大のポイントだ、というふうに私は理解をしております。そういうものが佐渡の合併協議会につくられていく、このセミナーの中でもつくられていくということ、私は確信しております。これで持って今日のセミナーを一応閉じさせていただきたいと思います。どうも静聴ありがとうございました。(拍手)

司会：パネリストの皆様ありがとうございました。そしてコーディネーターの望月様、ありがとうございました。退席にあたり今一度皆様に大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

#### 閉会の辞

司会：それでは閉会にあたり、主催者の市町村合併協議会副会長の肥田利夫(ひだとしお) 赤泊村議会議長よりご挨拶申し上げます。(拍手)

肥田：協議会の副会長を仰せつかっております赤泊の肥田利夫でございます。今日は長い時間大勢お集まりをいただきまして、私どもの、佐渡の市町村合併のことについて、いろいろとお聞きをいただきありがとうございました。これからの島の暮らしがどうあるべきか、今も皆さんの中から、1時間半傍聴者を待たせたというきついお叱りを受けましたことを、誠に申し訳なく思っております。前回の会議からは最初からマスコミの方、傍聴者の方に入っていたくように、私ども役員会として取り計らいました。この後まだ数回協議会が開かれる予定でございます。それは傍聴者の方に待ついただくことのないよう努力をいたしたいと思っておりますし、会長の方にもその旨申してございます。どうか大勢の方々から傍聴をしていただき、これからの島のあり方が、どうあったらいいかということのご示唆がいただければ、なお、ありがたいがなあ、こういうふうに思っている次第でございます。

さて、今日『市町村合併から始まる 私たちのまちづくり、島づくり』とい

うサブタイトルでこのセミナーを開かせていただきました。いろいろお聞きになって皆さんいかがでしょう。佐渡市の将来像を皆さんはどのように描かれたでしょうか。後でそれぞれ地域の議会の方々、あるいは市町村長等の方々等に、そのことを、お聞かせをいただければ、非常にありがたいがな、と思っております。ただそれがそのように全てなるということには、ちょっとどうかな、という気はいたしますけれども。できれば私どもの協議会にそういった、声を寄せていただければ、今日のこの催しが、成功裏であったと考えたいと思います。

はるばる対馬から美津島町長さんにお出でいただきました。私どもも一昨年、佐渡の議長会で美津島へ研修にお邪魔をした訳でございます。その時に、今日松村町長さんが言われました「YSが飛んだら島みんなの考え方が変わってきた」と。私どももあのYSで行った訳なんです、確か満席に近い人が乗っておりました。佐渡は合併を期に是非YSが飛ぶような、そういったことも皆さんから考えていただいて、ご協力をいただければ、島の活性化に繋がるのではないかなあ、と願っているところでございます。退席をされました松村美津島町長さん、並びにコーディネーターの新潟日報の望月編集室長さんには、公務ご多忙の折、はるばる佐渡までお越しいただきまして、ご示唆をいただきましたことに感謝を申し上げますと共に、会場の準備等それぞれ迷惑をおかけいたしましたご当地両津市の皆さんに心から感謝を申し上げ、そして今日ご参集の皆様方がますますこれから、新しい佐渡が島のために、ご尽力いただけること、そして、ご活躍あられんことをご祈念申し上げまして、閉会のご挨拶に代えさせていただきます。本日はありがとうございました。(拍手)

司会：ありがとうございました。以上をもちまして本日のプログラムは全て終了いたしました。本日はお忙しい中、市町村合併公開セミナー『まちづくりと市町村合併』にご参加いただきありがとうございました。なおアンケートは今後の参考にさせていただきますので、お帰りの際、受付の係の者にお渡しください。また会場内にお忘れ物などございませんよう、お気をつけてお帰りください。本日のご来場誠にありがとうございました。